

---

# ここで一句！

更級 優月

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ここで一句！

### 【Nコード】

N2443K

### 【作者名】

更級 優月

### 【あらすじ】

県内でも一、二を争う難関私立高校である『旭ヶ丘高等学校』。そこに歴代最高得点で合格した光圀と歴代最低得点で合格した雨月あめつき。双子なのに学力が正反対な二人が織り成す学園コメディ(?)、これより開幕！

## 発句『合格発表』（前書き）

どうも、蒼翡翠です。今回、『ここぞ一句！』という小説を投稿させていただけます。『まさゆめ。』と同時並行で進めていくことと想っているので、更新が不定期になるかもしれません。そのところは、ご了承ください。

## 発句『合格発表』

桜の芽が開きかける3月中旬。ある難関私立高校の合格発表が行われた。

張り出された結果を見て喜ぶものもいれば、自分の番号がないことにシヨックを隠しきれないものもいる。

そんな中、周りのものより一回り小さいのが一人。

容姿、声色は少女そのもの。

しかし、性別はれつきとした男。

そんな彼の名は、桐谷光圀。

「あ、あつた」

小さいながらも、なんとか自分の番号を見つけることが出来た光圀。その隣で自分の番号をひたすら探す光圀そっくりの少女。

性別は女。

彼女の名は、桐谷雨月。

光圀の双子の姉である。

「雨月姉さん、見つかった？」

「うーん…あ！ あつた！ あつたよ光圀！」

どうやら彼女も自分の番号を見つけることが出来たようだ。

「よかつたね、姉さん？」

「よかつたよ、光圀」

そうして二人は自分の点数を聞くために、事務室に赴いた。

旭ヶ丘高校では、県立高校と同じく五教科250点満点で入試を行う。

そして、希望する生徒には、とった点数を公表してくれるのだ。

「失礼します」

二人の声が重なる。

「点数かい？」

椅子に腰掛けていた初老の男性がおっとりとした口調で二人に尋ね

かける。

「はい」

光圀が答える。

「さっそくですが、点数を教えてくださいただけますか？」

雨月が催促する。

「それじゃあ、そこに座って」

初老の男性は、自分の座っている向かい側の空いている席を勧める。

「「しつれいします」」

二人の声がまたも重なる。

二人は椅子にちょこんと座った。

「それでは最初に光圀君からね。光圀君は歴代最高得点で合格したようだね」

初老の男性が微笑む。

「えっ？」

光圀はポカン顔。

「それじゃあ、得点ね。国語：50点 数学：50点 英語：50

点 理科：49点 社会：50点。合計249点だ。惜しかったね。

はい。これが詳細結果だよ」

そういつて一枚の紙を光圀の前に出す。

そこには上記の結果が書いてあり、『歴代最高得点』という赤い判が押してあった。

「すごいじゃん光圀！」

雨月はその結果を見て驚く。

「…ハハッ」

光圀は呆然とその紙を眺めた。

「それじゃあ次は雨月さんね。君はもう少し勉強したほうが良いかもしれないね」

初老の男性苦笑い。

「なっ！ ど、どうしてですか!？」

「それじゃあ、得点ね。国語：10点 数学：11点 英語：12

点 理科：11点 社会：13点。合計57点だ。これからがんばってね」

そういって一枚の紙を兩月の前に出す。

そこには上記の結果が書いてあり、『歴代最低得点』という青い判が押してあった。

「なんでよー!」

兩月は絶叫した。

発句『合格発表』（後書き）

『俳句・川柳』、『弓道』というキーワードがありますが、もう少し後にならないと出てきません。申し訳ないです。あと、この小説が皆様に楽しんでいただけるようにしたいです。…がんばります！

2011年1月4日…内容を若干編集しました。

第一句『入学式・其の壱』

ドタドタドタ……

「姉さん、遅刻するよ！」

僕は玄関から呼びかける。

「待って、光圀！」

階段の上から返事が返ってくる。

「今日は？入学式？何だから。急いで！」

「十分急いでるわよ！」

はあ…、初日からこんな状態で大丈夫かなあ…。

ところかわって、旭ヶ丘高校。

「はあ、はあ…。間に合ったあ…」

「……？間に合った？じゃないよ！超ギリギリだよ！」

なんとか間に合った僕と姉さん。あーもう、なんで初日から汗だくの全力疾走になるんだよ！

「…はっ！僕はどのクラスなんだろう？」

急いで教室に向かわないといけないので、僕は自分のクラスを確認する。

「えーつと……あ！あつた！」

旭ヶ丘高校は各学年とも一組から六組までの6クラスある。

ちなみに、僕は一年二組だった。

「私はどこかなあ………」

姉さんも自分のクラスを探し始める。

「……！」

姉さんは驚愕の表情を浮かべる。

「姉さん！どうしたの！」

僕は少々驚きながらも、姉さんに声をかける。



「み……光圀と……同じ……クラスじゃ……ない……」  
「……」

なぜそれだけでその表情を浮かべなきゃならないんだ？  
僕も姉さんのクラスを確認。

…六組だった。

「姉さん。早くクラスに行こう。先生に怒られるよ？」

僕は姉さんにそう言って、半ば姉さんを引きずるようにして、生徒用昇降口を通過した。

「ふう……。姉さんはホントにダメだなあ……」

僕は今自分のクラスである一年二組に向かって歩いていくところだ。姉さんを六組においてきたとき、もうホームルームが始まっていたので、多分二組でも始まっていることだろう。

…ムツ！ 前方に二組のプレートを発見！

さあて、どうやって入ろう……。

そんなことを考えながら、教室の後ろの出入り口のところにしゃがみこみ、中の状況を探る。

…よし！どうやら先生がまだ来ていないようだ。

それで僕は安心して、扉を引き開けた。

「！」

教室内にいた生徒が全員僕のほうを向く。

…なに、どうしたの？

すると、一人の男子が僕のところにやってきた。

その男子は背がとても高い。

だいたい180cmぐらいあるだろうか？

僕は145cmだから、彼を見上げる形になる。

すると、彼が頬を赤らめ、口を開いた。

「一目ぼれしました。俺と付き合ってください！」

その瞬間、教室が静寂に包まれる。

その静寂を最初に破ったのは、僕だった。

「……えええええ！」

僕が驚きの声を上げた瞬間、教室内が一気ににぎやかになる。

「播磨！ よく言った！」

「大悟、お前って奴は……」

「先を越されたあー！」

……。

僕、もうお婿にいけません。

何故だかはわからないけど、涙が出てきた。

「……す、すみませんでした！……はあ、俺、女の子泣かせちゃった」

僕は男です！

僕の着ている制服を見て！

この制服は男子用だよ！？

「ん？ でもよくよく見てみると、何で男子の制服着てるんだ？」

僕の前の大男……もとい。播磨君だっけ？ が僕を眺めて呟く。

その瞬間、僕の中でなにかがはじけた。

「あの！ 言っておきますけど僕は男です！ 間違わないで下さい

！」

ありつたけの大声で叫んだ。

教室がまた静寂に包まれる。

そして、大お……もとい。播磨君が床に膝を付き、崩れ落ちる。

「……はは、俺は、俺は……」

なにか彼の口から白いボヤ……としたものが顔を出している。

……これは放っておいたら、きっと天に召されるな。

「播磨君、戻ってきて！ 君には明るい未来が待っているんだよ！」

入学式で遺影が登場しないようにするため、僕は必死に播磨君の頬をたたく。

五分後

「…は！」

よかった。息を吹き返した。

「大丈夫？」

僕は自分の席から声をかける。

運命の悪戯なのか、僕の席は播磨君の隣だった。

なので、僕は椅子に座って、播磨君をあの世の一步手前から呼び戻していたのだ。

「……俺は…何を…？」

……。

何も思い出さないほうがいい。

思い出したら今度こそ召されてしまう。

「貧血じゃないか… 播磨！ 蘇ったか！」……」

僕の言葉を遮って叫んだのは彼の友達だろうか？

目に涙を浮かべながら彼に抱きつく。

うっん、映えないねえ…。

「？…あ、ああ。地獄の底から蘇ってきたぜ」

播磨君が抱きつく男子の頭に手を置き、言った。

その瞬間、

「おらー！ 席に着けー！ ホームルームを始めるぞ…って、お前

らはなにしてんじゃー！」

教室に入ってきた筋肉質の教師。

どうやら、彼がこのクラスの担任らしい。

「先生！ これには深いわけが…」

「問答無用！ お前らは椅子の上に正座してろ！」

「そ、そんなあ…」

教室が笑いに包まれる。

僕も思わず笑ってしまった。

「それじゃあ、このあと入学式があるからな。準備して置くように」

先生はそう言って教師用の机の椅子に座る。

威風堂々って感じた。

とにかく、僕はこれからこのクラスで過ごすことになるけど、この先どうなる事やら…。

第一句『入学式・其の巻』(後書き)

作者「第一回、俳句・川柳愛好会！」

光圈&雨月「なにそれ」

作者「このコーナーは、二人が思ったことを俳句や川柳にしておうというコーナーです」

光圈「さては、なかなか俳句や川柳が出てこないから、いつそコーナーにしちゃおうって奴か？」

作者「…うっ」

雨月「図星なのね…」

光圈「まあ、いいけど…」

作者&雨月「いいの!?!」

光圈「いいよ」

作者「じゃあ、第一回は光圈君の一句です。どうぞ」

光圈「?ああ不安 僕はこの先 どうなるの? 《光圈》」

作者&雨月「ガンバ…」

2011年1月4日…内容を若干編集しました。

## 第二句『入学式・其の式』

「えー…そのように…では……おりました…」  
長い。

とにかく長い。

只今入学式の最中です。

ここ（旭ヶ丘高校）の学校長が新入生に対しての挨拶を行っていません。

もう始まってからかれこれ三十五分経過しています。

「…そのように…では……おりました…」

あー、もう！

長い！

いつまで続くんだ、この拷問！

僕はいらいらし始める。

すると、隣の席に座っていた播磨君（偶然にも、隣になった）が話しかけてきた。

「なあ、あの糞ハゲ（学校長）、さっきから同じことを何回も言うてねえか？」

その播磨君の指摘を受け、僕は学校長の話しに耳を傾ける。

「…そのように、我が『旭ヶ丘高校』では、『勤勉』『自立』『部活』の三つに重点を置いておりました…」

ほうほう、そうなのか…。

「…そのように、我が『旭ヶ丘高校』では、『勤勉』『自立』『部活』の三つに重点を置いておりました…」

あ、本当だ！

あのハゲ何回も同じところをリピートしてやがる！

「な、本当だろ？」

隣で播磨君が囁く。

僕も「本当だね」と囁く。

あまり大声で話していると、先生に怒られてしまつからだ。

- それから十五分経過 -

「……ごさいますて……我が校の特色はと言いますと……」  
言ってることは変わったが、まだまだ続きそうな勢い。  
誰かあのハゲを止める！

永久に続くぞ入学式！

「はあ…俺、あの糞ハゲのスピーチで死ぬのかなあ……」  
隣で播磨君が呟く。

播磨君、人はスピーチでは死なないと思うが。

そんなとき、一人の救世主が現れた。

それは、我がクラスの担任、？先生だ（まだ名前を聞いていないので不明）。

彼は勇敢にも自分の席から立ち上がり、ステージに登壇し、スピーチ中の学校長に何か囁いたのだ。

先生がステージから降壇すると、学校長は、

「以上で終わりじゃ。皆の衆、学校生活を楽しむのじゃぞ」  
そういい残して降壇した。

ああ、彼の勇氣ある行動がなかったら、さっきの播磨君の呟きが現実のものになっていたことだろう。

あっぱれ、？先生！

「これで入学式を終わります。…一同、礼」  
進行の先生が入学式終了の宣言をして、旭ヶ丘高校の入学式が閉幕した。

なによりも、犠牲者が出なかったのがよかったと僕は思う。

・所変わって学校長室

「フム、もうちょっと語りたかったのだがのう…」  
学校長が残念そうに呟く。

「ダメですよ学校長。時間を五十分オーバーしているんですから」  
教頭が学校長に注意する。

「じゃが、新入生達に『高校生とは何をするのか』についてもっと詳しく語りたかったのだがのう…」  
また学校長が残念そうに呟く。

「でもダメです！ 学校長はあの場で同じ事を何回も、いや、何十回もおっしゃっていましたよ？」

教頭が追い討ちをかける。

「いや、わしは同じことを何度も言ってはおらぬぞ」  
学校長の反論。

「それじゃあ、他の先生方にお聞きになられてください。みんな」  
言っていた」と申すでしょうから

教頭のトドメの一言。

「…ぐぬぬ、そんなことはありません。このわしに限って…」

学校長は現実を認めようとはしなかった。

教頭は頭を抱え、深いため息をついた。



第二句『入学式・其の式』(後書き)

光圀「無事、生還」

雨月「なんなのよ、あの糞ハゲエー！」

作者「落ち着いてください」

雨月「落ち着いてられるかー！」

作者「第二回、俳句・川柳愛好会は雨月さんですよ」

雨月「そんなもん、光圀にやらせれば良いでしょー！」

光圀「僕、前回やったもん」

作者「と、いういわけで、お願いします」

雨月「しょうがないわね……。……。決めた！」

作者「それではどうぞ」

雨月「？ムカつくわ あのヨボヨボの ハゲジジイ？」

光圀「…退学になっちゃうよ？」

2011年1月4日…内容を若干編集しました。

### 第三句『入学式・其の参』

あの長い長い入学式の後、教室に帰ってきた僕たちはすごいことになつていた。

男子A「おい、あのジジイの話、長くねかつたか？」

男子B「そうだな、あれはないよな」

男子A「同じことを何回も言つてよお……。時間の無駄だつーの！」

男子B「ほんとだよ。俺らに時間返せよ！　つて感じだよな」

男子C「まあまあ、無事終わったことだし、良いじゃないか」

男子A & B「ちよつとおまえ廊下に来い！」

男子C「え！？　ちよ、ちよつと待つて……。ぎゃあああああ……」

ごらんの通り、大荒れです。

僕？

僕は自分の席で本を読んてたよ。

だつて、そんなことがあるクラスで平和に過ごすつて言つたら、読書以外にないでしょ。

ちよつと本を読み終え、パタンと本を閉じたその時、隣の席の播磨君が、声を掛けてきた。

「おい、光圀。ちよつとここ教えてくれねーか？」

こんな教室環境でも自主勉強をしている播磨君。

播磨君、君はすごい。

「……？　どこ？」

「教えて」といわれて黙つてしているわけにはいかないので、僕は椅子を播磨君の机に近づける。

「ここなんだけどな」

播磨君の机はとでもでかいので、僕は椅子の上に立ち膝で座る。

そして、播磨君の解けない問題を眺める。

《問3(2)バルト三国と呼ばれる三つの国を挙げなさい》

「どうだ、分かるか？」

播磨君が心配そうに僕の顔を見る。

「大丈夫。分かったから」

僕は右手でグーを作り、胸の前に掲げた。

「本当か！」

播磨君は目を輝かせる。

その姿はまるで、お菓子をもらった幼稚園児のように。

「で、答えは？」

キラキラと目を輝かせながら、播磨君は僕を急かす。

「んーとね。？リトアニア？と？ラトビア？と？エストニア？の三つだよ」

僕が答えると、さらに目を輝かせる播磨君。

「…すげえ。光圈、お前天才だな」

「いやいや…。そんなにすごくないよ…」

僕は播磨君の言ったことを否定する。

その時、周りで騒いでいたクラスメイトが、こちらの様子を見て集まってきた。

「何やってんの、お二人さん？」

ある男子が話しかけて来た。

この人誰だろうと思っていると、彼は僕の心の中を見透かしたように、話し始めた。

「すまんすまん。まだ名乗ってなかったな。俺は大崎由依おおさき ゆい。よろしくな」

そう言っで彼は手を出してきた。

どうやらよろしくの握手をするつもりらしい。

「僕は桐谷光圈。いっておくけど、僕は男だからね」

僕は念のため、言っておいた。

そして、大崎君の手を握り、握手をする。

「ああ、お前朝こいつに告られてたんだってな。とんだ災難にあっただんだな、桐谷」

「まったくだよ。どうして男の僕が同性から告白されないといけな

いのさ」

「まあ、一つの思い出としてとっとけば良いじゃないか」

「嫌だよ。あんなこと思い出じゃないから」

「……それは、ちよっとひどいぞ……」

隣から弱い声が……。

播磨君がうなだれている。

ちよっと言い過ぎたかな？

「おい、播磨！ どうした？」

大崎君が播磨君の顔を覗き込み、あたかもシェイクスピアの悲劇のように言った。

播磨君は彼にか弱い声で反応する。

「……おう、大崎か。…今はそつとしといてくれ……」

それっきり、播磨君は静かになった。…問題はどうするのだろうか？

「桐谷、こいつが元気になるまでそつとしといてやってくれ」

大崎君が僕に囁きかける。

「うん、分かった」

僕もそう囁き返す。

結局、播磨君が元気を取り戻したのは放課後だった。

### 第三句『入学式・其の参』（後書き）

作者「第三回、俳句・川柳愛好会！今回は…この方！」

播磨「…？ 二二二は…？」

光圀「は、播磨君！」

雨月「誰？」

光圀「僕の友達」

雨月「ふくん…そう」

作者「それでは播磨君、一句お願いします」

播磨「いきなり言われてもなあ…。？我がクラス やってきました  
大嵐？…こんな感じで良いか？」

光圀&作者「……」

雨月「あなた達のクラスで一体何が…！？」

2011年1月4日…内容を若干編集しました。

#### 第四句『入学式・其の肆』

時は流れて、放課後。

この高校は珍しいことに、入学式から新入生は部活動への参加が認められている。

と、いうことで…

「ねえ、播磨君。どこの部活に入るの？」

「うーん…まだ決めてねえ」

僕と播磨君は誰もいなくなった放課後の教室で雑談をしている。

他のみんなは部活に体験参加したり、家に帰ったりと様々だ。

でも、僕と播磨君がこうして教室に残っているだけは、前話を読んでもらえば分かってもらえると思う。

「じゃあ、光圀は何部に入るんだ？」

鞆の中に今日渡された物をしまっていると、播磨君が僕に尋ねてきた。

「…。僕も決めてないや」

愛想笑いを浮かべて、僕は答える。

すると、播磨君が僕に提案する。

「光圀…。一緒に部活を見て回らないか？」

唐突な提案に少したじろく僕。

でも、考えてみると、良いかもしれない。

「その提案、のった！」

こうして、部活見学ツアーが始まった…。

#### 《野球部》

「嫌っ！ 僕、野球できないからやだ！」

「そういわずに、見るだけ見てみようぜ」  
今、僕たちは校庭隅の芝生の辺りにいます。  
そこで押し合い問答を繰り返しています。  
僕的には野球部だけは避けたいところだ。  
「なあ、光圀……」  
播磨君がしゃがんで僕の目の高さにあわせる。  
「何さ、播磨君」  
僕は正面に播磨君の顔を見据えて、尋ねる。  
「どうしても嫌か？」  
播磨君が野球部の練習風景を指差して言った。  
「嫌だ！」  
強調して言った。  
「そうか……」  
播磨君はそう呟き、立ち上がる。  
そして、野球部の部活見学は行われなのまま、次の部活へと向かった……。

## 《陸上部》

「ねえ、播磨君」  
「ん、なんだ光圀？」  
「ここはやめない？」  
「……ああ、そうだな」  
とてつもない練習をみて、僕たちは足早にその場所を去った。

## 《長いので省略》

「播磨君、ここは…?」

「『俳句・川柳部』だよ」

今、僕たちは新校舎二階の端っこにある、俳句・川柳部の部室前にいます。

一応、ここで最後のはずだ。

「播磨君、開けないの…?」

「…そういう光圈こそ開けないのか?」

「こついうものって、たくましい男の子が開けるもんじゃないの?」

「…光圈。そんなこと、聞いたことねえぞ?…こついうときは、小柄な少女が開けるものなんだからな」

「…!?小柄?はまだ許せるけど、?少女?とはなんだ!僕は男だぞ!」

「いいから光圈開けちゃえよ」

なんだかこのままだと永久に続くな、これ。…これだけは使いたくなかったけど、しょうがない。最終兵器だ。

「…ねえ、播磨君。…ここ、開けてくれないかな?…僕の…ために…」(上目遣い)

「ぶはあ!」

播磨君は顔を真っ赤にして、鼻を押さえる。

手の間から垂れているのはなんだい?

トマトジュースかな?

「…ねえ、開けてくれる?」

改めて播磨君に問いかける。

「…ああ、ああ。も、もちろんだとも…」

播磨君が快く引き受けてくれた。よかったです…。



( 播磨君の鼻d…トマトジュースが止まるまで少々お待ち下さい )

「よし、開けるぞ」

そう言つて播磨君は扉に手を掛ける。

「失礼します！」

そして、扉を開けた。

その扉の先には…

「あら？ 部活体験に来たの？」

「男の子が来てくれるなんて…。私、嬉しくて死にそう…」

「死んじゃダメよ、伊那！ここで死んだら彼らに迷惑が掛かっちゃうでしょ！」

「……」

四人の女性が畳に座つてお茶会みたいなのを開いてました。

「し、失礼しました！ 間違えました！」

播磨君は大慌てで扉を閉める。

そりゃあ、吃驚するだろうね。

「播磨君、どうする？」

僕は播磨君に尋ねる。

「どうしような…？」

播磨君は僕の顔を見て、呟く。

その時、扉の向こうから声が聞こえた。

「そんなところに立ってないで、入ってきたら…？」

「……」

これは従わないと、後で大変な事になりそうだ。

「播磨君、覚悟はいい？」

僕は小声で播磨君に尋ねる。

「ああ、覚悟を決めるしかないな」

播磨君も小声で僕に囁く。

そしてまた、播磨君は扉に手を掛け、それを開く。

「失礼します！」

僕たちは声をそろえて、俳句・川柳部の部室内に一步足を踏み入れた。

第四句『入学式・其の肆』(後書き)

光圀「何だ、これ？」

光圀は一枚の紙切れを見つけた。彼はそれを拾い上げ、読み始めた。

『これからヨロシク！ - 作者より』

光圀「……」

彼は静かに怒りを堪えていた…。

光圀「第四回、俳句・川柳愛好会。今回は姉さんがいないので、僕が進めます。今回一句を作ってくれるのはこの人です」

大崎「…む！ なんだここはあ！…お、光圀。お前、どうしてこんなところに…」

光圀「…大崎君、それでは一句、どうぞ！」

大崎「…光圀！ いきなり言うなや！…？新緑の 草木に映えるは 血溜りか？」

光圀「…大崎君、何があつたのか教えてくれる？」

2011年1月4日…内容を若干編集しました。

第五句『入学式・其の伍』

「えー、改めまして…俳句・川柳部へようこそ」

部長？らしき女性がお茶の入った湯のみを持ちながら、おしとやかに言った。…というか、ここの部員少ないよね？四人だよ？

四人。しかも全員女性。僕たちにとっては実に喜ばしくない状況だ。……お茶……どうぞ……」

この四人の中で一番静かな女性ひとが僕たち二人にお茶を出してくれた。「あ、ありがとうございます」

播磨君がそのお茶を受け取りお礼を言う。それを聞いた彼女は、頬を赤らめて…そっぽを向く。それを見たほかの俳句・川柳部の皆さんが、彼女に寄り集まる。そして、何か囁きあっている。…なんだから、嫌な予感が……。

「播磨君。どうする？ 帰る？」

僕は播磨君に耳打ちをする。それを聞いた播磨君は、微かに頷く。そして、行動開始。僕と播磨君は立ち上がる。そして、こそこそと扉に向かって歩き始めた。だが…

「あら、どちらへ行かれるんですか？」

四人のうちの一人に感づかれてしまった。ヤバイ。急いで扉へ。でも…

「あ、あかない！」

どうやってもあかない扉。何故？

「あ、扉ならさつき鍵を閉めましたか…？」

四人のなかで一番背のちっちゃい人が言った。な、なんだってえー！

「逃がさないわよお…」

四人が八モる。きれいに。これはかなりヤバイ。

「播磨君！ 早く鍵を！ 鍵をお…」

僕はそうして播磨君を急かしていたが、彼女達に捕まってしまった。

そして、なぜか意識を失った。

「……ふふっ。まるで女の子ね」

「こら、伊那！ それはやりすぎでしょうー！」

「でもあ……。玲だってこれ、可愛いと思わないの？」

「……うっ」

何だ？ 何か聞こえるぞ？ 可愛い？…なにが？

「……伊那、玲。……こっちは凜々しいぞ」

「うわあ、本当だ！ カッコイイ……」

「……私、抱きつきたいんですけど」

「……玲。本音が出てる……」

「佳奈の言つとおりだよ。玲、本音まる聞こえ」

「う、嘘お！……恥ずかしい……」

なんだかにぎやかだなあ。そろそろ起きるか。ムクッ。……む？

何だこの体全体の痺れは。そして、なんだか下半身が涼しいな……

「……！ 玲！ 彼起きたよ！」

「……！ 本当だ！ 伊那、事情を説明しなさいよ！」

……？ 何の事情？

「何で私なのよ！」

「それは伊那がしたからでしょう。あの格好に！」

……？ 格好？ 僕は不思議に思い、着衣を確認。……ブレザー。

シャツ。リボン？……スカート！？ 黒靴下（膝下までの長いヤツ）

？。そしてシューズ。……。これ、ここの学校の女子の制服じゃん。

……まさか……

「あ、あのお……。鏡ありますか？」

恐る恐る聞いてみる。すると、例の静かな人が、指をある方向に向

ける。そこには、鏡。

「ありがとうございます」

お礼を言つて、鏡の前に向かう。

「だ、ダメエ！」

誰かが必死に止めようとしているが、もう遅い。僕は鏡の前に立つ。そこに映し出されたのは……僕の姉にそっくりな少女でした。……つーか、女装した僕じゃん！ 急に怒りがこみ上げてきて、肩をわなわな震わせながら、彼女達のほうを振り返る。

「一体、何故僕がこのような格好をしているのか、是非とも教えていただきたいものですねえ……」

そういいながら、あたりを見回す。まず、俳句・川柳部の四人。そして、隅のほうでなぜかタキシードに身を包んで気を失っている播磨君。……あらかた分かってきた。

「あなたたちが僕たちが意識を失っている間に、色々と悪戯したんですね？ だから僕がこの服を着ていることになる。酷すぎますよ。こういうことはもう止めていただきたいのですが……。一刻も早く僕の制服を返してください」

最後の部分は、少し語尾を強く言ってみた。たぶんそうしないと、制服返してくれそうにないもの。

「あの制服なら、君の机の上においてきたよ？」

伊那と呼ばれていた人がケロリと答えた。

……本気で言ってるの？

「本当ならば、とつてきてください」

僕がそういうと、彼女はそっぽを向いて、言った。

「あああゝ？ それが先輩にお願いするときの態度かしらあ？」

「……！」

このお……。なんともいえない気持ちに襲われる。でも、このまま教室にこの格好で向かうのはかなり危険だ。しょうがない。僕は深々と頭を下げ、懇願する。

「お願いします。僕の制服を取ってきていただけませんか？」

だが、必死の懇願むなしく、彼女はその申し出を却下した。……なんか、涙が出てきた。

「こら、伊那！ 彼、泣いちゃったでしょ！ どうするのよ！」  
玲と呼ばれていた女性が、伊那と呼ばれている女性にグーのパンチをお見舞いする。頭にダイレクトヒットして、伊那と呼ばれている女性は頭を押さええて蹲る。

「いたあ…なにすんのよ、玲！」

「伊那は後輩いじめて何が楽しいのよ！」

あ、先輩同士の喧嘩が始まった。すぐ終わるだろうと見ていたが、結局、一時間続いた。その間、播磨君が意識を取り戻したが、僕の姿を見て、大量の血を撒き散らし、再び彼の意識は暗闇の底へと落ちていった。

一時間後。

「ふう、ふう…。伊那、彼の制服を取ってきなさい！ 今すぐに！」

「はいはい、分かりました。取ってくれば良いんでしょう？」

そう言い残し、伊那と呼ばれている女性は、扉を開けて、制服を取りに向かった。よし！ ようやく帰れる。彼女が戻ってくるまで、僕は佳奈と呼ばれていた物静かな女性と共に、播磨君の蘇生を試みた。

「播磨君、おきて」

僕が呼びかける。……反応なし。

「おい、少年。起きるがよい」

佳奈先輩が呼びかける。……反応なし。

「播磨君、おきて」

僕は再び呼びかける。……反応なし。

「……起きないな」

佳奈先輩は、やれやれといった感じだ。

「そうですね。……こうなったら、最終兵器だ」

僕は使いたくなかった方法に出た。

「播磨君、起きてください！ 僕を一人にしないで下さい！」

そう言つて抱きつく。その光景に、周りで見ている三人は顔を赤らめる。だが、この捨て身の作戦が功をそうし、播磨君復活。

「……！ 播磨君！ よかったあ……」

僕は抱きつきながら、呟く。

「…光圀！ なんてお前、俺に抱きついてるんだ！？」

播磨君は、女子の制服を着て抱きついていて僕を見ないようにして言った。

「だって、播磨君が倒れたから、僕、心配しちゃって……」

率直に思ったことを言つたつもりだが、播磨君は僕を引っぺがし、真つ赤になつた顔を隠すように後ろを向く。

「播磨君、顔真つ赤だよ？」

僕の問いかけに、播磨君は何かを呟いたが、小声だったため、聞こえなかった。「お前のせいだろ」と聞こえたが、真相は闇の中だ。

ちょうどその時、制服を取りに行つていた伊那先輩が、すごい剣幕で、何も持たずに戻ってきた。なんだか嫌な予感がしてきたぞ。

「伊那、彼の制服は？」

玲先輩が彼女に尋ねる。伊那先輩はその剣幕のまま、坦々と話し始めた。

「あのね。教室に行つたけど、あるはずの制服がなかったのよ。で、職員室に行つたら、あの制服は、彼の家に届けたつてなつて……」

事情を説明したら、そのまま帰らせなさいつて。絶対ばれないから、大丈夫だつて……」

嫌な予感的中。予想していたよりもすごい衝撃。たとえるなら、『あなたはあと五分後に死にます』つていきなり言われるくらいに。

なんだよ、ばれないつて。ここの学校の教師陣は本当に大丈夫なのだろうか。生徒一人の運命が掛かっているというのに。

「……それでは、今日のところはそれで辛抱していただくしかないようですね」

玲先輩、なんて事を！ ポンと佳奈先輩が僕の肩に手を乗せ、諭すように僕に言つた。



「……少年。人は必ず越えなければいけない試練があるんだ。今が、その時だ」

「佳奈先輩！ それは別に越えなくてもいい試練じゃないですか！？」

僕は必死だ。このまま帰ったら、確実に僕は変態になってしまう。それだけは避けたかった。でも、無理だった。無常にも、部活終了のチャイムが鳴り響き、僕はそのままの格好で帰るハメになってしまった。

「ふう……僕、もうお嬢にいけないよお……」

一人悲しく帰路についていると、姉さんが駆け寄ってきた。

「光圀、どうしたのその格好！？……まさか、女装趣味に目覚めたの！？」

駆け寄ってきて早々何を言うんだ！ 僕の硝子の純粋な心にひびが入ったぞ！

「いや、違うんだ姉さん。これには深い事情が……」

これまでの経緯いきさつを詳しく話す。姉さんは最初は信じがたい様子だったが、なんとか信じてくれた。

「それじゃあ、光圀の制服は家にあるって事ね」

「そう。だから早く帰りたいよ。こんな姿、クラスメイトに見られたら、恥ずかしくてもう学校行けなくなっちゃうよ……」

「あら、そう？ 私的に似合ってると思うけど……」

「なっ」

なんて事を言うんだ、姉さん！

……そりゃあ、似合うでしょう。僕たち、双子だもの。でも、さっきの一言で、僕の心はズタズタだ。

「……いいから姉さん、早く家に帰ろう！」

「わっ！ ちょっと待って、光圀いいい！」

姉さんの手を強引に引っ張って、僕は急いで家路についた。

所変わって、桐谷邸。

「ない、ない！ 僕の制服がどこにもない！」

僕は女子の制服を着ながら頭を抱える。先生は届けたと言っていたが、実は預かっているのではないか……。するとそのとき、家の固定電話が鳴った。

「姉さん、僕が出るからいいよ」

「あー、ありがとう、光圀」

姉さんに一言声をかけ、固定電話を取る。

「はい、桐谷です」

電話にそう呼びかけると、電話主が話し始めた。

「もしもし？ 君は…光圀君かい？」

「え、はい。そうですが…」

何故僕の名前を知っているんだ？

「旭ヶ丘高校一学年主任の幟のぼしだが、君の制服の件についてだが……」  
なに！？ 制服！？ 僕はその単語を聞き、少し興奮する。

「先生！ 僕の、僕の制服はどうなるんですか！？」

電話の向こうで、まあ落ち着きなさいと声が聞こえた。…それを聞き、僕は少し落ち着きを取り戻す。

「光圀君は、学校から何を着て帰ったんだい？」

…うつ。答え辛い。でも、正直に言うしかない。

「俳句・川柳部の先輩が用意した、女子用の制服です」

それを言った後、急に顔が火照ってきたのが分かった。

「ふーん、そうか」

電話の向こうで幟先生が呟く。そして、次の先生の一言で、僕は学校が嫌いになった。

「それじゃあ、これからは女子の制服で学校に通いなさい。君の制服は私が預かっているから。それじゃあ、勉強するんだぞ？」

な、なんだってえー！？

「先生、何ですか！ 僕はおと『ツー、ツー……』……終わった」

受話器を元に戻し、その場に崩れ落ちる。もう終わった。僕の平和な高校生ライフ。これから僕は変質者扱いを受けることだろう。重い足を引きずるようにして、自分の部屋へと戻ってきた。そして、何もする気がなくなり、女子用の制服を着たまま、ベットに入り、そのまま寝てしまった。僕はその日、目を開けることはなかった。

第五句『入学式・其の伍』(後書き)

光圀「なんか僕、最近嫌な扱いを受けてる気がする…」

雨月「気のせいよ光圀。えーと、第五回、俳句・川柳愛好会。今回はこの人」

佳奈「……ここはどこだ？」

光圀「うげっ！」

雨月「知り合い？」

佳奈「…む、少年！」

光圀「それでは、一句お願いします！」

佳奈「……うゝむ。唐突過ぎる。……(遠くを見つめる)……?果てしなく 広がる空間 雪化粧?」

光圀「今までで一番良い句だあ……」

佳奈「……照れるではないか、少年」

雨月「何なの、この人……」

第六句『女装の麗人 - 其の巻 -』

” ン、ン、ン……”

「……………うるさいなあ」

手を伸ばし、めざまし時計を止める。音が鳴り止み、静かな時間が訪れる。そうして、僕はまた深い眠りに落ちていった…はずだった。

「こらあ！ 起きなさいーいー！」

怒号と共に、姉さんが僕の部屋に怒鳴り込んできた。正直、朝のこの来訪は…キツイ。

「……………ふあ、姉さん？ ……一体どうしたの？」

僕は仕方なくベットのの上に起き上がり、重たい瞼をゴシゴシと擦る。でも、なかなか眠気は飛んでいかない。

「” 一体どうしたの？” じゃないわよ！ 今日は学校でしょ！ 早く準備しなさい！」

立ったまま姉さんが僕を見下ろし、そう言い放った。

「……………珍しいね。姉さんが朝シャキっとしているなんてね」

ようやくどこかへ飛んで行った眠気。僕はベットから立ち上がる。今日は春のクセに肌寒い。リビングに下りていくと、妙に下半身が肌寒く感じた。僕は” おやつ？” と思い、リビングにおいてあるソファの前で立ち止まる。何だろうと思うって下を向くと……………

「……………」

…………… 思い出した。昨日一騒動起きて、僕の” 本当の” 制服は学校で、僕らの学年主任の幟ほし先生が預かってるんだった。どうしよう……………。

「光圀！ ご飯出てるから早く食べちゃいなさい！ そして早く準備して。学校に遅れるわよ！」

…………… 一体、姉さんに何があったのだろうか？ 何か悪いものでも食べたのだろうか？ いつものダラっとした姉さんではない。シャキっとしすぎていて、とても気持ちが悪い。

「早くしないと置いていくわよ！」

玄関から、姉さんが大声で呼びかけてきた。正直、一人でこの格好で登校するのはかなりヤバイ。大急ぎで準備をしなければ…。

「姉さん、待つてよ！ もう少しだから…」

僕は手が八本あっても足りないほど大急ぎで支度を済ませ、無事、姉さんと共に登校することが出来た。きつと、今日は一生忘れることの出来ない日になるんだろっと思いつながら…。

学校到着。

僕は教室前の廊下で立ち尽くしていた。なぜかって？ そりゃあ、僕が女子の制服を着ているからだ。入ればいいだろって？

…いやいや。それじゃあ、僕がただの変態になってしまっじゃないか。

「はあ…どうしよう」

僕はため息混じりに呟く。と、その時ふと声を掛けられた。

「……うお！ み、光圀！ 何だその格好は…！」

僕はその声が出たほうに顔を向ける。そこにいたのは、僕自身よく知っている人物だった。

「は、播磨君…」

なんだか泣きたくなってきた。播磨君に僕のこの格好を見られてしまったこともあるが、それと同じく。播磨君がそこに”居る”という安堵感もある。正直なところ、後述の方が今は大きいのかもしれなかった。

「播磨くうくん！」

僕は思いつきり彼に抱きつく。

「うおっ！ み、光圀…！？ おい、ちょっと離れろって」

播磨君は迷惑そうに呟く。でも、彼の顔を見る限り、そんな風に思っていないことが分かる。…播磨君って、思っていることが顔に出やすいタイプなんだね。おもしろい。本当に。

「播磨君。僕はずっと播磨君のものだよ？」

上目遣いで僕は呟く。

「き、気持ち悪いから、や、やめろぉー！」

そう叫ぶと、僕を脇にどけて、一目散に廊下を走って行ってしまった。

……僕たちのクラスはここなのに、彼は何処へ行くのだろうか？

その時、チャイムが鳴った。

「仕方がない。……地獄を見るしかないのか」

僕はいいやや現実を見つめ直し、教室のドアを開け放った。

きつと、みんなは僕を見て”変態”だとか、”あっち系”だとか言  
つて差別するのだろうかと思っていた。

が、現実には厳しいものばかりではなかった。

まず、ドアを開けた瞬間、みんながこちらを向く。

次に、男子の何人かは鼻血を垂らし、そのうちの一人が倒れる。

さらに、そのほかの男子や女子が席を立ち、僕を幾重にも囲む。

そして、僕を囲んだ男子、女子のみなさんが、”可愛い”だの、”

俺の好みだ”だの、”妹に欲しい”だのと騒ぎ出す。

……僕が思うにこのクラスは”異常”の塊だと思う。

だってさ、普通女子の制服を着て登校してきた男子を見たら、誰でも「へ、変態だぁー！」って騒ぎ出すことだろう。でも、このクラ

スのみんなは、その間逆のことで騒いでいるのだ。

……僕は今、別の意味での”地獄”に居ます。

そんな僕に救いの手が。それは、播磨君。

「……うお！　なんだこの人だかりは……！」

彼もこの”異常”な状態を判断し、どうにかしようとしているらしい  
かった。

「播磨君！　助けて！」

僕は声を上げる。

「…光圀か！？　なるほど。この人だかりは光圀って訳か」

なんか播磨君は勝手に納得モード。僕のことを救ってはくれなかった。  
た。ああ、誰か僕を救ってくれる心のやさしい人はいませんか？

そんなことを思っていると、教室の前のドアが開いた。そして、入ってきたのは、僕らの担任、高坂先生だ。

「お前ら何してんだあ！」

先生はこの異様なさまを見て一喝。すると、それまで僕に群がっていたクラスのみんなは、仕方なさそうに自分の席へと戻っていった。ふう、助かった。本当にありがとうございます、高坂先生。

「それでは、朝のSHRをはじめぞ」

先生が教卓の前に立ち、朝のSHRが始まった。

「まずは連絡事項だ。……桐谷はこれからあの制服で登校してくるから、くれぐれも桐谷に迷惑を掛けないように。以上だ」

ドカーン！ 僕の中で爆弾が爆発した。

「”以上”じゃないいいー！」

僕は絶叫する。

「……？ どうした、桐谷？」

先生は急に絶叫した僕の方を向きながら、僕に尋ねてきた。

「どうしたじゃありません！ 僕の制服を返してください！」

怒り任せに言い放つ。それに対し、先生はというと……

「いいじゃないか。お前はそっちのほうが似合ってるぞ」

「……（怒）」

多分、今の僕の顔はすごいことになっているだろう。

「分かった。そんなに言うならみんなに聞いてみようじゃないか」

先生は仕方がないと言わんばかりに。吐き捨てるように言った。

「先生！ 僕の人生が掛かっているんですからね？」

僕は一応念を押ししておいた。

「それでは、桐谷君の制服はどちらが似合っていると思いますか？ HR長の沖野さんがみんなに呼びかける。すると、みんなは「もちろん、女子の制服！」と、見事な大合唱を決めて見せた。……このクラス、未恐ろしい。

「それじゃあ、光圀君。このままで……いいよね？」



もう、諦めるしかないか…

「……………もう、良いです。これで」

吐き捨てるように言った。クラスの男子&一部の女子大喜び。ああ、僕の人生、終わった…。

第六句『女装の麗人・其の壺』(後書き)

光圀「……第六回、俳句・川柳愛好会……」

雨月「どうしたの光圀？ 元気ないけど……？」

光圀「放っておいてくれ、姉さん。…さて、今回はこの人」

伊那「やつほう！ 来てしまった…ぜ！」

光圀&雨月『うぜえ…』

光圀「さっさと一句、お願いします」

伊那「ええ〜。もっとゆっくりしてたいのお〜」

光圀「いいから」 雨月「はやく」

伊那「しょうがないわねえ…。？そよそよと 風に吹かれて 桜散  
る？どーよ!？」

光圀&雨月『う、うまい!…だけどなんかムカつく』

第七句『女装の麗人・其の式』(前書き)

すみません！ 更新遅れました。理由はたくさんあるんですが、「言い訳するな！」と言われそうなので、あえて書きません。更新が遅れた理由は、ご想像下さい。ボクが高校生であるということを考えれば分かると思います。

それでは、本編をどうぞ。

## 第七句『女装の麗人 - 其の式 -』

「…………え〜。今の地球環境の問題は多々ありますが、中でも極めて著しいものは…………」

あゝ暇だ。今、現代社会という科目の授業中です。でも、僕はこの範囲の予習をやってきているので、授業で確認するだけ。ほとんど当たっていたから、余計暇になってしまっている。

「…………え〜。地球温暖化というものは…………」

さつき気が付いたんだけど、この先生、黒板に何も書いていない。すべて教科書の内容を口頭で話しているだけ。…………これじゃあ、現代社会嫌いになる人が増えてしまいますよ、先生。

「それでは、これから黒板に書くことをノートに書いてください」

…………お？ ついに板書か。予習してきたけど一応板書しておこう。先生を見守っていると、手にチョークを持つ。そして黒板に何かを書き始めた。だが、すぐにチョークを置く先生。あれ？ 早くない？ よく先生が黒板に書いた文字を確認。それは、次のように書いてあった。

？先生がさつき言った事、テストに出るので確認しておくこと？

…………（怒）。

書いて説明しろよ。

心の中で突っ込んだ瞬間

『キーン コーン カーン コーン…………』

「…………おや？ もう終わってしまいましたか…………」

先生はそう言くと教卓の上に乗っかっていた教科書の類をすべて閉

じ始める。すべて閉じ終えると、

「終わります」

と一言。…おい、ちょっと待て。

「先生、何で書いて説明しないんですか」

僕が言おうと思っていたことを他の男子に言われてしまった。…たしか、彼の名前は…そう、飯綱。飯綱浩平君だ。僕と同じ中学出身で、いつも必ず一回は眼鏡を”クイツ”っとする『まじめ』なヤツだ。

「先生。ちゃんと黒板に書いて説明してくれないと僕らが分からないじゃないですか。このままじゃあ、現代社会だけ点数がガタ落ちですね。…先生はそれでもよろしいのでしょうか？」

そうして眼鏡を”クイツ”と右手の人差し指で押し上げる。それに賛同して、数名の男子が「そーだそーだ！」と声を上げる。

「ほら、皆さん不満がってますよ？…まあ、先生がこのままで行くのなら僕は止めませんが、もし点数が低かったら…分かっていまずよね？」

そうして浩平君は首をぼきぼきと鳴らす。現社の先生は震え上がった。いそいそと教室を後にした。その後姿を見送って、みんなが歓声を上げる。…もちろん、僕も。

「まあ、落ち着くんだみんな。僕は当たり前のことをしただけだ」  
浩平君はそう言って謙遜している。彼は極度に目立つことを嫌うのだ。だが、先ほどの行いは、目立つに十分すぎた。結局浩平君は顔を熟れた林檎のように顔を真っ赤にして自分の席に戻っていった。彼の席は僕の席の二つ前になっており、彼の姿がよく見える。僕は席を立ち上がり、浩平君の席のところへやってきた。浩平君は僕が来たことに気が付くと、伏せていた顔を上げた。

「…光圏か。何用だい？」

浩平君はなるべく僕を見ないようにしながら言った。

「いや、さっきはありがとう。なんだか聞いててすっきりしたよ」  
それに対し、浩平君の顔を覗き込むようにして言う。すると彼は顔

を背けた。

「光圈。僕を誘惑しないでくれないか？ その麗しい姿で僕の方を見ないで欲しいのだが…」

そういう彼は顔が真っ赤だ。…：…なんだか、見ていて面白い

「光圈。君は僕をおちよくっているのかい？」

顔を僕から背けるようにして、彼はボソツと呟いた。

「ああ、そうだとしたらどうする？」

「お前を殴る」

「…ごめん。僕が悪かったよ」

浩平君が本気で殴ったらかなり痛いことを僕は知っているので、この辺でふざけるのはやめにしよう。

『キーン コーン カーン コーン…』

「ほら、光圈。始業のチャイムが鳴ったぞ。席に座れ」

浩平君はそう言って、僕を手で追い払おうとする。…：そこまでするか。

「はいはい。分かりましたよ」

そういつつ、僕は大急ぎで自分の席へと戻っていった。

『二時間目 現代文』

「はい、起立」

現文の桐生先生が教卓の後ろ側に立ち、言った。それにしたがって、僕たちは立ちあがる。

「礼」

HR長の沖野さんが号令をかけ、授業が始まった。

「はい、それでは教科書を開いて。今日は初めての授業ですが進め

たいと思います。まず最初に勉強するのは、『陰陽師』です」  
「おい。いきなり『陰陽師』って。どんな教科書だよ。僕はそう思  
い、目次をパラパラとめくる。

小説

・ 陰陽師

P 8

・ 犬神家の一族

P 14

・ 日本沈没

P 37

随筆

・ 私は犯罪者

P 49

小説

・ 親指探し

P 68

評論

・ 『自殺』はいいのか？

P 85

・ 社会的『いじめ』について

P 103

随筆

・ 私たち、事故にあいました…

P 131

・ 殺人犯の親

P 148

小説

・ 人間失格

P 188

・ 八ツ墓村

P 213

「…なに、この教科書。だめだよ！？ こんな教材子供に教えちゃ  
！ 道踏み外しちゃうよ！？」  
「えー、では、『陰陽師』を読み進めていこうと思います」  
先生！ 直ちに教科書の変更を希望します！……。

『キーン コーン カーン コーン…』

「ふう……」

やっと終わった現代文の授業。いったいどうしてあんな教材ばかり扱っているんだ？…まだ『陰陽師』はいいが、『人間失格』って…。どう考えたっておかしいでしょう。

「なんだったんだ、あの授業は…」

隣の席からため息混じりに聞こえてきた。ふとそちらを見ると、播磨君が机に突っ伏していた。

「播磨君、大丈夫？」

「ああ、光圀。大丈夫だ。…なあ、光圀。あの教科書、やばくないか？」

どうやら播磨君も同じ考えを抱いていたらしい。

「播磨君も思った？ あの教科書、イカれてるよねえ…」

「なんだってあの教科書で学ばなければいけないんだ？」

「仕方がないよ。でも、深読みは禁物だね。後戻りが出来ない場所まで行ってしまつから…」

「だな。深読みは危ないな」

そんなこんなでその話しはお開きとなった。

「で、次ってなんだっけ？」

僕は播磨君に尋ねる。

「えーっと、芸術だ。俺は音楽だが、光圀は何だ？」

「僕も…音楽だ…よ…」

「光圀。お前、何でそんなにモジモジしてんだ？」

「えっ！ それは…そのお…」

そう。僕がモジモジするには理由がある。それは、僕の声にある。

僕は不思議なことに声変わりしなかった。さらに、喉仏も出ていないのだ。それゆえ、女子に間違われるのだ。もちろん、声変わりもしていないので、女子のソプラノぐらいの高さも出せるのだ。でも、それをみんなの前で見せるとなると……。

「おい、光圀。もうそろそろ音楽室に行かないと遅れるぞ」



その声によって現実に戻ってきた僕。

「あ、うん。そうだね」

大急ぎで準備をして、播磨君と共に僕は音楽室に向かった。

第七句『女装の麗人・其の式』(後書き)

光圀「第七回、俳句・川柳愛好会」

雨月「…はじまったわね」

光圀「ちゃっちゃと終わらせます。この後音楽なんで」

雨月「ちゃっちゃとやっちゃって」

光圀「今回は…この人」

光「こんにちは」

光圀&雨月「誰!？」

光「俳句・川柳部の森永光です」

光圀「ああ、あの人かあ…」

雨月「…一体、誰…?」

光「あら、光圀君。こちらは?」

光圀「双子の姉です」

光「こんにちは。森永です」

雨月「こんにちは。雨月です」

光圀「それはさておき。光先輩。一句お願いします」

光「了解です。……。？五月晴れ 風が吹きゆく 丘の上？ どうかしら？」

光圀&雨月「お見事です」

## 第八句『女装の麗人 - 其の参 -』

バタバタバタ……

階段を上る音が響く。音楽室までの道のりは遠く、到底休み時間をゆっくり過ぎるなど出来はしない。そのため、音楽室に移動する生徒は大急ぎ。そんな中に、播磨君と光圀も入っていた。

「はあ、はあ……。播磨君、早く！」

「み、光圀。は、早すぎる……」

二人は今、音楽室のある南校舎（旭ヶ丘高校の校舎は、？北校舎？、？東校舎？、？中央校舎？、？南校舎？の計四つの建物から成るとても大きな私立高校である。ちなみに、光圀たちのクラスがあるのは、北校舎の端っこ。音楽室があるのは、南校舎の三階の一番端っこである）の階段の踊り場にいる。光圀は息を切らせながらも、まだ行ける状態だったが、播磨君はもうすでに限界に近い。

「播磨君、あともう少しだからさあ、がんばろうよ……」

「……いや、俺はもう無理だ。光圀、先に行け」

なんだか、スパイ映画のようだなと、光圀は思った。

結局、光圀は疲れきった播磨君と共に、音楽室に到着した。幸いなことに、始業のチャイムには間に合った。

授業が始まる前に、先生からの挨拶（ここは自己紹介といったほうが妥当かな……？）が始まった。

「皆さん、入学おめでとうございます。私は一年間、皆さんの？音楽？を受け持ちます、生野葵といいます。よろしく願います」  
生野先生が自己紹介を終えた。

次に、席の確認から始まった。

この学校では、音楽は？学芸？という科目の中に組み込まれている。余談だが、『学芸』の中に組み込まれている科目は、？美術？、

？書道？、？音楽？の三つ。この？学芸？の時間は、入学前に行われた『学芸希望調査』で選択した科目を勉強することになっている。そして、？学芸？は二クラス合同で行われる。だから、僕たち二組は一組で？音楽？を選択した人たちと一緒にになるわけだ。

「それでは、今から席順を発表します。まず、ここから……」  
生野先生はそう言つて席順を発表していった。

で、僕は、音楽室を真上から見た場合、一番右の列の一番前だった。…なんで、一番前？

「それでは、各自席に座ってください」

そうして、席に座つたはいいが、お隣さん、後ろの席、斜め後ろの席の三つの席すべてが女子。そして、その三人の女子は、僕のことを女子だと思つているみたいで…

「ねえ、桐谷さんはどうして音楽選んだの？」

「なにか楽器弾けるの？」

「桐谷さんつて、小さくて可愛いよね…」

……ひどい。僕は『男』ですから！よく女子と間違われるけど、これでもれっきとした男子ですから！ 着ている物は気にしないで！

これは嫌々着ているだけだから！

「はい、起立」

生野先生の号令。一同起立して、礼をする。

二限続きの音楽が始まった。

「はい、みなさん。早速ですが、校歌の練習をしていきたいと思ひます」

やはり、そうきたか…。

「ええ〜！」

大ブーイングが巻き起こる。そりゃあ、誰だつて校歌の練習は嫌だよ。

「そんな事言わずに、まあ、がんばりましょう」

そんなわけで、校歌の練習開始。校歌の歌詞が分からないので、歌えないじゃないか！と思つてしていると、先生が校歌の歌詞がプリント

された紙を配り始めた。そして、全員に行き渡ったところで、校歌の練習開始。

『旭ヶ丘高校校歌』

作詞・作曲者：未詳

太陽輝く青空の下  
元気な声が響いてる  
丘の上に佇むは  
希望に満ちた学び舎よ

今 未来に向かって  
僕達は学びだす  
それぞれの『未来』を目指して

嗚呼、ここは旭ヶ丘  
いつまでもここにある  
全てはここから始まる  
僕達旭ヶ丘高校生

なんだか、校歌って感じがしないなあ……。  
「まだ声が出ていません。もう少し声を出していきましょう。もう一回です」  
声が出ないのは当たり前だと思っただけです……。だって、音程もままならない状態なんだから、大目に見て欲しいぐらいなのに……。生野先生、厳しすぎる。

その後、何度も歌わされた校歌。大体十回は歌っただろうか？でも、そのおかげか、歌詞も、音程も覚えてしまった。ふと思ったことだが、この校歌、音程が比較的高めだ。僕は別にどうってことないけど、他の男子は高音部になると、顔を歪めて、つらそうにしている。何回目だったか、僕は播磨君が気になって、列の一番後ろを見た。（播磨君の席は、僕がいる列の一番後ろです）すると、播磨君は以外にもつらそうな顔をしていなかった。そのうち、僕が見ていることに気が付いたのか、目をそらしてしまった。…ちよっとシヨック。

そうして、音楽一時間は終わった。もう一時間音楽あるけど、体力持つかなあ…。

- 休み時間中の音楽室 -

「桐谷さん、声綺麗だねえ…」

「うん、私も思う。それ」

「ねえ、桐谷さん、今度カラオケ行かない？」

……ヤバイ。完全に女の子に見られてる。どうしよう。こっぴつときはどうしたら良いんだ…!?

「おい、光圀。大丈夫か？」

突然呼ばれたことに、しどろもどろになる僕。振り返ると、播磨君が心配そうに僕を見下ろしていた。

「は、播磨君…」

僕は泣きそうになった。いや、泣いてしまった。目の端から、暖かいものが頬を流れ落ちた。

「お、おい光圀!? どうした!？」

慌て始める播磨君。こんな僕たちを、先ほどの女子達は静かに眺めていた。

「播磨君、播磨君……」

僕は播磨君に抱きつき、何度も彼の名前を呼び続けていた…。

- 音楽二時間目 -

「はい、席について!」

生野先生の声が音楽室に響く。その声を聞き、あわてて自分の席に戻る人が結構目に付く。あの後、僕は何とか泣き止み、少し目を赤く腫らしながらも、自分の席についていた。なので、特にお咎めがあるわけでもない。

「桐谷さん、大丈夫?」

お隣の女子が声をかけてきた。

「うん、大丈夫」

すかさず反応。

「…何か悩み事なら、私にでも言っただけ?」

彼女はそう言っただけ、軽くウインクをした。

「あ、あはは…」

その場は、僕がお茶を濁す感じで終わった。

(だめだ、この三人、僕が男だっただけで事理解してない…)

「はい。次は列ごとに校歌を歌っていききたいと思います」

先生はにこやかな笑顔を浮かべながら言った。…う、嬉しくない。

「それでは、一番窓側のそっこの列から。」

(うげっ! いきなり!?…し、仕方がない)

嫌々、僕らの列の人たちは立ち上がる。そして、歌い始めた。

- 少々お待ち下さい -

「はい。結構でした」

…ノ、ノドがあ…声、出しすぎたあ…



僕は喉を押さええてうずくまる。人って、声出しすぎると喉痛めるんですね…。今日、初めて実感。

それから、僕は喉の不調に耐えながらも、無事、音楽の授業をやり通した。

- 授業後 -

「ねえ、桐谷くん？」

先生に呼ばれた。

「はい、何でしょうか？」

トコトコと先生のところへ歩み寄ると、先生が僕の喉の辺りを覗き込むように言った。

「喉仏出ていないのね…。桐谷君、合唱部に入らない？ それも、ソプラノで」

「……………！」

か、勧誘！ しかも、ソプラノ！

…なんでこう、嫌なことが続くの…？

第八句『女装の麗人・其の参』(後書き)

光圀「…」

雨月「大丈夫?」

光圀「…うん。なんとか」

雨月「光圀がこんな調子ですが、はじめたいと思います」

高坂「…ここは?」

光圀「…せ、先生!」

高坂「…おお、桐谷君じゃないか」

雨月「先生、一句お願いします」

高坂「…ん?…ああ。君が桐谷君のお姉さんだね。分かった。少し待っててくれ。…。?わびさびの心を学んだ 閏月?」

光圀&雨月「…か、かつこいい」

第九句 『女装の麗人 - 其の肆 -』

不幸な出来事が吹き去って、今はお待ちかねの昼食タイムです。各々、教室で自由に机を移動して、親しい友人同士でお弁当を広げあっています。

「はあ……」

光圀は不満げにため息を一つ。

「光圀、大丈夫か？」

光圀と相席をしているのは、彼の友人の一人播磨君。彼の弁当箱は見かけにもよらず小さく、その量はおにぎり一個分に等しい。

「だってさあ、今日は不幸続きなんだよ？僕が一体何をしたら言うのさ」

お弁当のおかずをつつきながら、光圀が言った。

「光圀、大丈夫だ。不幸の後には幸福が待ってるって。もう少しの辛抱だ」

「でも、もしまた不幸なことが起きたら？」

「また辛抱すればいい」

「限界つてもんがあるでしょう？僕はもう限界なの！」

昼食時に繰り広げられた押し問答。結末は、五校時目始まり五分前のチャイムが鳴り響いたことで終わった。

「五校時目つてなんだっけ？」

お弁当を片付けながら、光圀がボソツと呟く。

「体育」

いつの間にか着替えていた播磨君が、彼に告げる。その途端、彼は『聞いてないよ』と言わんばかりの表情を浮かべた。

「やば！着替えなきゃ！」

光圀は体操着袋を持って廊下へ。

ちなみに…

何故廊下に出たのかというと、旭ヶ丘高校では、女子が教室、男子が廊下で着替えるような仕組みがいつの間にか出来てしまっているためである。

廊下に出た光圀は、大急ぎで着替え始める。スカートを脱ぎ、ブレザーを脱ぎ…。そんな彼を、周りで見替えていた男子達が食い入るように見つめていた。そんな、下心丸見えのギャラリに気づいた光圀。

「わっ！ な、何なのみんな！？ 早く着替えないと間に合わなくなるよ？」

それでも動かないギャラリたち。その様子を、播磨君は遠目で見ていた。

五校時目始まりのチャイムが鳴り響く。校庭には、一、二組の男子が四列横隊で綺麗に並んでいた。光圀たち二組の男子は、始まりのチャイムが鳴る一分前に整列を完了させたのだった。

「よし。それじゃあ初めての体育だな。今日は1800mを走ってもらうからね」

体育教師が言ったその言葉は、整列している生徒に死刑を宣告したに等しい効果を与えた。全員が青ざめ、一部の生徒は仮病を訴えている。

「ちなみに、これをやらないものは体育の成績は『1』だからな。注意しろよ？」

脅しの文句。光圀始め、一、二組の男子は不本意ながらも、成績のため、走ることにした。

走る順番は、一組の二列目が一番。二組の二列目が二番。二組の一列目が三番。一組の二列目が四番という結果になった。ちなみに、光圀は三番目。播磨君は二番目である。

「一列目。準備しろ」

嫌な顔を浮かべながらも、仕方なくスタートラインに立つ一組の一列目の男子面々。

「よい、スタート！」

走り出した一組一列目。そして、早速差が開けてきた。数名がトップ争いを繰り広げ、また数名が中間で走り、それ以外が後ろのほうで必死に走っているという状況だ。

「こうしてみると、みんなカツコイイ…」

光圀がふと呟いた一言。この言葉に奮起した二組の男子面々。一組一列目の男子が息を切らし、フラフラと200mトラックの内側を歩いている。

お次は二組二列目。

何故だか二列目のみんなは闘志を燃え滾らせていて、スタートラインは物々しい空気に包まれていた。

「お、おい。お前ら、一体どうしたんだ？」

体育教師でさえたじろくともすごい状況になっているのだ。

「先生。早く始めてください」

ある男子がイライラをぶちまけるかのように吐き捨てた。

「お、おう。それじゃあ、よい、スタート！」

一斉にスタートした男子達。そこから、仁義なき戦いが勃発した。いきなりのトップスピード。もはや、1800m走るということを完全に忘れているかのようで、顔を真っ赤に硬直させ、決してスピードを落とそうとしない。

そして、最終ラップ。彼らはそのトップスピードを維持し、そのままゴールした。ゴールした彼らは、そのまま倒れ、保健室に連れて行かれた。

必然的な結末だった。ただ、唯一播磨君だけが保健室に行かなくて済んだ。

そうしてやってきた、二組一列目。

「はあ、やだなあ…」

光圈は露骨に嫌な顔をしながらスタートラインに立った。

「よいい、スタート！」

光圈が走り出した。と、同時に他の男子も走り出した。しかも、トツプスピードで。

「な、何でトツプスピードで走るの!？」

光圈は驚愕の表情を浮かべながらも、彼らについていこうと必死に走った。

結果は、組内ビリ。

当然だった。彼らも二組目同様、保健室に運ばれたのだから。

「…はあ、はあ」

肩で息をする光圈。長い髪の毛が前に垂れていて、その美しい容姿を隠す簾のようだった。

そんな光圈に近寄る影が一つ。光圈の頭の上に手をポンと置き、優しく撫でた。

「光圈、お疲れ様」

播磨君は紳士的に振舞うと、そのまま木陰へと光圈を誘った。

「ありがとう、播磨君」

長い黒髪（といっても、肩までだけど…）を後ろに流し、笑顔で答える光圈。播磨君の行いは、疲れた彼女を優しく介抱する彼氏そのものだった。

「…あ、あの二人い…」

そんな二人（特に播磨君）を妬む人は多く、一種の禍々しいオーラを纏っていた。しかし、肝心の二人はそんな風に思われているとはつゆ知らず、木陰で雑談を楽しんでいた。

「播磨君。急にどうしたの？」

あの優しい態度に裏があると思ったのか、光圈は彼に尋ねる。

「いや、特に意味は無いからな」

その彼は、あやふやな返事を光圈に返す。

「本当に？」

疑い続ける光圈。

「ああ、本当だ。純粹に光圀を迎えただけだよ」  
妙に神妙な面持ちの播磨君。光圀はそんな彼から何かを読み取ったのか、それつきり会話は途絶えてしまった。

「よし、整列！」

体育教師が整列の号令を掛けたのはその直後だった。

あたりに散らばっていた者々はすばやく整列する。一組は綺麗に並んでいた。だが、二組はそうはいかない。なぜなら、大部分の男子が保健室で厄介になっていたからである。そのため、二組のところに並んでいたのは、光圀と播磨君のたった二人だけだった。

「…二組がさびしくなったな」

体育教師が場の雰囲気や和らげようと言った一言。それは皮肉にも場のモチベーションを下げるまったくの逆効果を果たしてしまった。

「と、とにかくこれで体育を終わります」

空気に耐え切れなくなったのか、急遽体育教師は号令を掛けた。

「ありがとうございます！」

暗い挨拶が、太陽がカッカと照りわたる校庭に重く響いた。

第九句『女装の麗人・其の肆』(後書き)

光圀「悲惨だ…」

雨月「私も…」

光圀「どうして、姉さん？」

雨月「出番がないのよ…」

光圀「…そのうち来るって」

雨月「いや、このまま忘れられるかもしれない、私…」

光圀「…まあ、いいや。第八回、俳句・川柳愛好会。今日のゲストはこの人」

？「なんだ、ここは？」

光圀「げっ！ あの現代社会教師！」

？「なんだその言い草は！ 私には宇部という名前があるんだぞ！」

光圀「…ふうん？ じゃあ、一句作ってくださいよ、宇部先生？」

宇部「…ぐう。仕方がない。こんな小娘にとやかく言われたくないものだがな。…？ 一つずつ 食べるべきかな 夏蜜柑？」

光圀「…で？」



宇部「き、貴様あ……」

雨月「で、出番下さい……」

作者「……そろそろ雨月の出番でも作るのかなあ」

## 第十句『取り戻した日常』

つらい体育を終えて、教室に戻ってきた男子達。誰もが顔に暗い表情を浮かべている。

「疲れたね、播磨君？」

光圀は播磨の顔を見上げ、言った。

「確かに。疲れたな…」

播磨がバックから取り出したタオルで汗を拭きながら言った。

「それにしても、何でみんな全力で走ってたんだろ…」

「さあ。俺にも見当がつかない」

そんなわけで、廊下で着替え始める光圀と播磨。

と、体操着袋の中を覗き込んだ光圀の表情が急に明るくなる。

「どうした？」

播磨は彼の急な表情の変化に疑問を抱く。

「播磨君、やったよ！ 僕の日常が戻って来るんだよ！」

その場でへたり込むようにしてうれし泣きを始めた光圀。

ただ事ではない。

播磨は光圀の体操着袋の中身を確認する。

旭ヶ丘高校の男子用制服が入っていた。

「光圀、やったな」

播磨も自体の概要を理解した。

光圀の本当の制服が帰ってきたのだ。もうこれで、光圀が苦しむことはなくなるのだ。

「…と、早く着替えないとな。光圀、早いところ着替えちゃおうぜ」「うん」

しばしの喜びの後、二人はせかせかと着替え始めた。

二人が着替え終わると、保健室でくたばっていた他の男子がぞろぞろとやってきた。やってくるなり、光圀の制服を見、絶望の表情を浮かべる。

「終わった！ 夢のような日々が…！」

「俺、もう生きていく自信がないよ…！」

「誰か！ 俺に硫酸をもつてこい！」

数名が絶望感を味わい、さらに数名が脱力。ごく少数がちよっとおかしくなってしまうた。

「播磨君、僕ちよつと怖くなってきたよ」

光圀がそんな地獄のような光景を眺め、言った。

「ああ。俺もここがどこだか分からなくなってきたよ」

播磨も、悶え苦しむ（？）クラスメイトを見て、言った。

そんなこんなで六校時目、古典。

教室全体に、やりきれぬ悲壮感が満ちていた。

「起立！」

古典担当教師が号令を掛けた。女子と播磨・光圀はスクツと立ち上がる。だが、残りの男子は動くのが苦になっていくかの如く、動きが非常に遅く、立ち上がった途端にガタガタ震えだす始末。とんでもない状況である。

「礼！ 着席」

そんな彼らになるべくかわらないようにしているのか、授業が始まって彼らが指名される気配はない。

「次の問題は…飯綱。頼むぞ」

…む！

光圀の視線は指名された飯綱に向けられた。

絶望感に駆られながらも、必死に立ち上がる飯綱。

「力行下一段連用形です」

立ち上がり、はっきりとした声で言った。

「はい、正解です。下一段はこの『蹴る』しかないのです、しっかりと覚えてください」

先生が言い終えると、彼は眼鏡をクイツと中指で押し上げると、着席した。

「ねえ、播磨君」

光圀は隣に座っている播磨に声を掛ける。

「なんだ、光圀？」

播磨はチラリと光圀のほうを見て、言った。

「飯綱君、復活したね」

そう言つて、光圀は顎で飯綱の方を示す。

「ああ。そうだな。復活者第一号だな」

「こら！　そこで喋つてないで集中しろ」

先生が光圀と播磨に喝をいれた。ということ、雑談はお開きとなった。

？キーン　コーン…？

「む…？　もう終わつてしまつたか」

古典教師が時計を見ながら言った。

「この続きは次回やるからな。起立」

古典の授業が終わつた。

「なんだか簡単だつたね…」

光圀が黒板に書かれた文字を見ながら言った。

「だな」

播磨は教科書をペラペラと捲っていた。

「ところで、次は掃除だっけ？」

「あ、そうだな。めんどくさいけどやるしかねえか」

そうして、重い腰でも持ち上げるかのようにのっしりと立ち上がる

二人。と、そこへ近寄る影が一つ。

「よう！　元気かい、二人とも」

いきなりのことだったので、驚いて振り返る光圀と播磨。振り返っ

た先で、笑顔で笑いかけていたのは、大崎だった。

「なんだ、大崎くんかあ…」

「ビックリさせんなよ…」

よほどビックリしたのだろう。光圀と播磨は安堵の表情を浮かべた。  
「何？ そんなびっくりした？」

顔に笑みをたたえながら言う大崎。

「ああ、すごくビックリした」

それに対し、少し眉間にしわを寄せ、声のトーンを落として播磨は言った。

「すまんすまん…。それは謝るわ」

大崎は頭の後ろに手を置き、ぺこぺここと謝り始める。

「謝るのなら始めからするなよ…」

播磨はそんな大崎を見て言った。その隣でクスクスと笑う光圀。

「ふふつ。やつぱり大崎君は面白いね」

面白いと言われたのをいいことに、調子に乗り出す大崎。

「そうか？…よし！ 俺は世界一のコメディアンになってやる！」

いきなりの宣言に、教室はしーんと静まり返る。

「バカかお前はっ！」

そこへ、播磨の強烈な突っ込み。

「痛え！」

頭を抑え、その場にしゃがみこむ大崎。

「もう少し優しく出来ないのかよ…」

目尻に涙をためながら大崎が言った。

「ああ、できねえ」

ふんつと鼻を鳴らし、播磨が言った。

「お、鬼や…」

大崎はそう呟くと、頭をさする。

そんな二人を見て、光圀が声を挙げて笑った。そうして、笑いを噛み締めて言った。

「…ふ、二人で…ま、漫才できるんじゃないかな…ぶぶつ…」

そうしてまた笑い出す光圀。

「漫才か…」

神妙な面持ちで考え込む大崎。

「ま、漫才なんてするかあ！」  
なぜか大声で叫ぶ播磨。彼の顔は真っ赤なインクでも浴びたかのようになっっていた。

## 第十句『取り戻した日常』（後書き）

今回は『俳句・川柳愛好会』はお休みします。  
ところでお知らせです。

この小説、双子ジャンルがあるのに、全然双子って感じが出ていないように思えてきました。

なので、光圀編は一旦お休みします。  
申し訳ありません…。

次話からは、入学式当日から、雨月中心あめづきの話を書いていこうと思います。

…程よくなってきたら、光圀編に戻します。

なので、キーワードの中で、今まで登場しなかったものも、これからちらほらと出てくると思います。

ご期待下さい…。

第一首『桐谷雨月・其の巻』(前書き)

始まりました、雨月編。

正直、どう書いていいのか悩みました。

が、普通に書いてみました。

(悩んだ意味がないのですが…)

それでは、本編をどうぞ！



第一首『桐谷雨月・其の巻』

「すう…すう…」

朝の陽気が心地よい。いつも以上の心地よさに、今日は二度寝をしてしまった雨月つじつき。彼女はいつものように朝寝坊をしてしまふ、寝坊常習犯である。

と…

「ジリリ……」

ちよつど目覚まし時計がけたたましくなった。

「んむむ…」

雨月は不機嫌そうに目覚まし時計をつかみ、目の前に持ってきた。目を擦りながら時計の目盛りを見る。

? 7時38分?

「きゃああ!!」

朝の住宅街に、甲高い悲鳴が轟いた。

「姉さん、うるさいよお…」

と、扉を開けて入ってきたのは双子の弟、光圀。

「み、光圀…遅刻しちゃう…」

「だから何度も起こしたじゃん! 姉さん、早くしないと遅刻しちゃうからね? 下で待ってるよ」

そう言つて光圀は部屋を出て行った。

「ヤバイ…。急いで着替えなきゃ…」

雨月は急いで身支度に取り掛かった。

「姉さん、遅刻するよ!」

光圀が玄関から呼びかける。

「待つて、光圀!」

髪の毛を櫛で割きながら雨月は声を挙げた。

「今日は？入学式？何だから。急いで！」

さっきは待っててくれるって言ってたのに……。雨月の心の中で、怒りの炎がメラメラと燃え滾り始めた。

「十分急いでるわよ！」

自棄を起こした雨月。階段の下から、深いため息が聞こえてきた。

というわけで、光圈と雨月は遅刻ギリギリで旭ヶ丘高校に到着した。初日から遅刻しては、上級生から目を付けられる可能性があるので、そここのところは一安心な二人。

「はあ、はあ……。間に合ったあ……」

遅刻を免れた安心感からか、雨月が息を切らしながら言った。それに対して、同じく息を切らしている光圈がガラガラの喉で怒鳴った。

「……？間に合った？じゃないよ！超ギリギリだよ！」

彼はポケットからハンカチを取り出し、額の汗を拭いた。

と、何か重要なことでも思い出したかのようにポンと手を軽く叩くと、辺りをキョロキョロと見回して言った。

「……はっ！僕はどこのクラスなんだろう？」

彼はそう言つと息を整え、雨月を置き去りにして走っていった。

そんな彼を見て、雨月もその後を追った。

しばらく走ると、雨月は昇降口の隣の大きな掲示板に張られた紙をまじまじと眺めている光圈を見つけた。

どうやら自分のクラスを確認しているらしい。

一組から順を追って見ているということは、あらかたそんなところだろうと雨月は推測した。

「えーつと……あ！あつた！」

どうやら早くも自分の名前を見つけたらしい。

雨月ものんびりとしていられないと気づいたのか、その紙の前へと進み出て、自分のクラスを確認し始めた。

「私はどこかなあ……」

雨月も一組から順を追って自分の名前を搜索する。その途中、二組に光圀の名前を確認した。

「……」

驚愕と落胆の感情が入り混じったような表情をその顔に描き出した。そうして、六組に自分の名前があることを確認すると、落胆の色を一層濃いものにした。

「姉さん！ どうしたの」

そんな彼女の表情の変化に驚いたのか、光圀が彼女に尋ねかけた。

その問いかけに、彼女はか弱い子猫の泣き声のような声で、呟いた。

「み……光圀と……同じ……クラスじゃ……ない……」

「……」

あまりのしょうもない答えに、光圀は呆れ果てる。そして、彼女の名前が六組に書かれていることを確認すると、彼女を元氣付けるように言った。

「姉さん。早くクラスに行こう。先生に怒られるよ？」

それでも動こうとしない彼女のブレザーを強引につかみ、半ば引き摺るようにして、生徒用昇降口を通過した。

それから雨月は目に涙を溜め、六組に向かって廊下を重い足取りで一歩一歩進んでいた。

「はああ……」

溜息をつきつつ、着実に歩を進めていた。

そんなこんなで、ようやく六組に到着。

雨月はゆっくりと教室のドアを開ける。

あまりにもゆっくり過ぎて音も立たず、誰一人として彼女の来訪に気づく者はいなかった。

教室入り口に張ってあった座席表を見て、彼女は自分の席に辿り着く。

そして、力尽きたかのように座り込み、机にその身を預けた。

「み、光圈い〜…」

か細い声で呟く雨月。もう彼女の頭の中は光圈でいっぱいだった。

そんな時、悲しみに打ちひしがれる彼女に声を掛けたものがいた。

「……桐谷…さんだよな？ ねえ、どうしたの初日から…？」

重苦しい表情のまま、雨月は振り返る。そこに居たのは、腰まで届く程の長い黒髪を後ろで一つに束ねた清楚な少女だった。

「…あなた、だれ……？」

沈んだ声で返す雨月。

すると彼女は軽く微笑んで言った。

「ごめんなさい。まだ名乗ってなかったね。…私は堀田桔梗<sup>ほったききょう</sup>。よろしくね」

「……うん、よろしく。私は桐谷雨月。よろしく」

相変わらずの低テンションで挨拶を交わした雨月だった。

「ところで、なんでそんなに落ち込んでいるのでしょうか？」

桔梗は雨月に再度問いかける。雨月は、桔梗に全ての経緯を話した。

全て聞き終えた桔梗は静かに頷くと、罰が悪そうな表情を浮かべた。

「桐谷さんごめんなさい！ 桐谷さんがここまで落ち込んでいるとは知らずに私、私…」

何故だか泣き出す桔梗。

そんな彼女を見ていた雨月は落ち込んでいたことを忘れ、泣いてしまった桔梗のケアに当たっていた。

「そんなこと言わないで桔梗さん。そもそも私が光圈を溺愛してたことが原因だし…。ねえ、だから泣かないで、桔梗さん？」

優しく言ったのが、運悪く逆効果となってしまった。

「…うう…き、桐谷さん…優しい…うう…」

余計に泣き出した桔梗。

彼女の泣き方は珍しいことに、とても静かだった。彼女が泣いていても、周りの生徒は気がつかない。

無声泣である。

雨月は、自分で招いてしまったこの予想外の事態を收拾するのになりの労力を費やしたのだった。

「はい、席について下さい」

見るからに優しそうな女性が六組に入ってきたのは、雨月が桔梗を落ち着かせてからまもなくのことだった。

「私はこれから皆さんの担任を務めさせていただきます、一条桜花です。担当教科は国語です。どうぞ、お手柔らかに…」

一風変わった挨拶の後、全員の簡単な自己紹介を行った（というか、一条先生が強制的に行わせた）。名前、出身中学校、趣味、これからの抱負だけの至ってシンプルな自己紹介だが、雨月の行った自己紹介は、一年六組の教室を凄然とさせた。

「私は桐谷雨月と言います。出身中学校は簾荀中学校れんどつです。趣味は弟の光圀を見ていることです。これからの抱負については、平和に生きたいです。これからよろしくお願いします」

自己紹介を終えた途端、六組の教室に喻えようのない空気が傾れ込んだ。

六組の生徒達は口々に呟いている。

「なにあの趣味…」

「『弟さんを見ていること』…？ 変態じゃないの、あの人」

「これこそ『姉弟愛』きょうだいあいというやつか…」

雨月は自分がそんな風に思われているとは、露知らなかった。

第一首『桐谷雨月・其の巻』(後書き)

どうでしたか？

不適切な表現はなかったでしょうか？

とてつもなく不安です。

なにか不鮮明な点がありましたら、気軽に申し付け下さい。

ただし、この作品に対しての悪口はお断りです。

しばらく雨月編が続きます。ご了承下さい…。

## 第二首『桐谷雨月・其の貳』

「はい、それではこれから入学式が始まります。皆さんは廊下に出席番号順に二列に並んでください。分かりましたね？」

一条先生が張りのある声で言った。

さすがに「分かりました」と言う者はいなかったが、首を縦に振る者は四十人中十数人いた。

一条先生はその反応を不服と感じたらしく、教室を荒々しく出て行った。

教室内は原因不明の罪悪感に包まれた。

所変わって体育館。

あの後何とか機嫌を良くした担任一条に先導され、体育館へと入場した一年六組の面々。

もうその時には一組から五組まで入場していて、席に座っている状態だった。

簡単に言ってしまうえば、六組は『遅刻』したのだ。

もちろん、その原因は担任の一条。

機嫌が直るまで教室に戻ってこなかったことにある。

あえて誰も何も言わなかったが、待たされた六組の面々は憤りを精一杯隠していた。

罪悪感も最初だけ。すぐに彼女に対する怒りに変わっていった。

高校生活初日で、六組は一つにまとまったのだった。

ようやく今年度旭ヶ丘高校に入学する新入生が全員揃ったとの事で、入学式が始まった。

一〜五組はほのぼのとしているが、六組の雰囲気は尋常じゃなかった。

それはまるで、戦いの最前線の様子そのもの。  
中には一条に対する怒りから、鼻血を出すものまで現れる始末。  
だが、入学式はどんどん進む。

まず校長の挨拶から始まった。

「皆さんご入学おめでとございます。私からいくつか話をしたい  
と思いますので、静かに聞いて下さい」  
のんびりと話し始める校長。

「えー……本校では三つの大きな教育理念がありまして……」  
雨月は早速首を傾げた。

右隣に座る桔梗に小声で声を掛ける雨月。

「ねえ桔梗さん、？教育理念？って何？」

桔梗は軽く微笑み、雨月に説明し始めた。

「うーんと？教育理念？っていうのは、教えることについての根本  
的な考え方のことだよ。まあ、分かりやすく言うと目標みたいなも  
のかな？」

桔梗はそこまで言うと言葉を区切り、雨月に「分かった？」と小声  
で言った。

「うん、ありがとう」

雨月は小声で礼を述べると、後は校長の話を聞いていた。

五分後。

「えー…そのように……では……おりまして…」

「……あれ？」

雨月は頭の上に疑問符を浮かべた。だが、何に疑問を感じたのかを  
特定することは出来なかったが。

と、隣の桔梗が小声で話しかけてきた。

「ねえ、桐谷さん。あの校長先生さつきからずっと同じこと言っ  
てない？」

その途端、雨月の表情に光が燈った。



先程から悩んでいた謎の疑問の正体が分かったのだ。

雨月が感じた疑問の正体は、何度も同じ事を言っている校長のスピ  
ーチだったのだ。

謎が解決して、スッキリとした顔つきで雨月は桔梗に言った。

「ありがとう、桔梗さん。おかげで私の心に光が差し込んできたよ」  
桔梗は最初のうち、何故感謝されているのか判らずにいたが、状況  
をすぐに状況を理解した。

「あ、ど、どういたしまして…」

呂律が回らず、顔を手で押さえてしまった。

それから、雨月と桔梗は一言も喋ることもなく、入学式は幕を下ろ  
した。

入学式が終わり、各クラスに戻っていく生徒面々。

一年六組も、周りに合わせて教室へと戻っていく。

途中、雨月は桔梗の横に並び、先程の事を謝った。

「ちゃんとしてなきゃいけないのに、何度もごめんね？」

雨月が謝ると桔梗も謝り返した。

「うっん、私もあやふやで信憑性に欠ける答え方でごめんね」

互いに謝りあったことで二人の罪の意識は急速に薄れていった。

教室に帰ってくると、担任の一条はいきなり手に持っていた消しゴ  
ムを後方に投げると、そのまま教室を出て行ってしまった。

しーんと静まり返る教室。

やがて、一人の男子生徒がポツリと呟いた。

「俺、この学校辞めようかなあ…」

クラスでもかなりおとなしそうな男子の一言により、教室内は再び  
活気を取り戻す。

その活気は、『喜び』ではなく、『怒り』の賑わいであった。

「ねえ、あの先生理不尽すぎじゃない？」

「それよりもさあ、あの人精神病なんじゃないかな？」

「いや、違うだろう！ きっと麻薬中毒なんだよあいつは！」

聞こえてくるのは一条に対する暴言や罵倒の嵐。

高校生活初日からこれほどの罵倒を浴びる教師はそうはいないだろう。

もしかしたら、この広い世界の中で、一条ただ一人だけかもしれない。

雨月と桔梗も、一条の事で話し合っていた。

「ねえ、桐谷さん。一条先生の事どう思う？」

黒髪を櫛で梳かしながら桔梗は雨月にたずねた。

「うん…自分勝手な先生だと思う」

素直に思ったことを言った雨月に桔梗はこくりと頷いた。

「やっぱり桐谷さんも思う？」

？私もそうなんだ？と付け加えて桔梗は安堵の表情を浮かべた。

それから二人は…いや、六組の面々は一条の愚痴を言い合っていた。ただ、一人は監視役として廊下を見張っていた。

しばらく愚痴を言い合っていたが、監視役が「一条が来たぞ」といったのを皮切りに、しーんと静かになった。

一条が教室に入ってくると、彼女はにこやかに微笑むと、何度も頷きながら教卓の前までやってきた。

生徒達にはその微笑があの子からの誘いに見える、ある者は顔を青褪めさせていた。

一条はそんな彼らを気にも留めず、喋り始めた。

「それでは、これから授業が始まりますが、時間割をここに書いておきますね？」

黒板の左上にチョークを使って時間割を書き始めた。

時折、「この字、少し汚いわね…」と呟きながら、書いては消し、書いては消し…。

ようやく書き終えたのは、授業開始2分前だった。

「それではみなさん、がんばっていきましょうね？」

そう言い残し、一条は教室から姿を消した。

一条が姿を消すと、六組の生徒面々は一斉に黒板に書かれた時間割を確認する。

《六組時間割》

- 一時間目…音楽
- 二時間目…数学？
- 三時間目…古典
- 四時間目…理科A

「……」

一同は沈黙した。

そして、慌てふためき始めた。

「お、おい！ 音楽だってよ！」

「音楽室ってどこだよ！」

「早くしないと遅れるぞ！」

一同は大急ぎで音楽室に向かい始めた。

少し遅れて雨月と桔梗も音楽室に向かった。

「なんだか大変だよね、初日から……」

溜息とともに、桔梗が言った。

雨月はその言葉に頷くと、音楽室へ続く道をひたすら走った。

《音楽室》

六組の面々が音楽室に息を切らしながら入っていくと、音楽担当の針谷教諭が椅子に座っていた。

一同は怒られると思ったが、彼の反応はまったく予期せぬものだった。

「おや、皆さんどうしましたか？ 今日はい日授業はないはずですが……」

その瞬間、息を切らしていた一同は唖然し、事の発端となった一人

の人間の名を叫んだ。

「「「一条おお！」「」」

その声は、旭ヶ丘高校の校舎全体に響き渡った。

第二首『桐谷雨月・其の貳』(後書き)

すみません！ かなり遅れてしまいました！

理由は多々ありますが、一番の原因は夏バテで何事にも無気力になつていたことです…。

体調管理できなくてすみませんでした。

これからは夏バテしないような生活を送っていかうと思います(無理だな)。

本当に申し訳ありませんでした。

### 第三首『桐谷雨月・其の参』

只今教室。

音楽室から修羅の形相で戻ってきた一同は、各自自分の席に座って荒い呼吸を続けていた。

誰も、一言も喋らない。

一種異様な光景が広がっていた。

と、そこへやってきたのは担任の一条。

何も知らぬ彼女は勢い良く教室の扉を開け放つ。

そして、一言。

「皆さん、ごめんなさいね？ 私の手違いで明日の時間割を書いてしまいました。許してくださいね？」

微笑ましい笑顔で言う彼女に、全員例の形相で顔を向け、怒りを露にした。

「ふざけんじゃねえぞ！」

「なんだよ！ 許すわけねえだろ！」

「謝ったつて無駄なんだよ！」

「大の大人がそんな謝り方で良いと思ってるの！？ 呆れたわ！」

「何か償えよ！ そうでもしないと許さねえぞ！」

もはや無法地帯。

言いたい放題である。

雨月と桔梗は何も言わなかったものの、怒りで握った拳が白く変色していた。

そして、怒りの矛先である一条は、この期に及んで逆切れ。

「…な、何なのよ！ 生意気言ってんじやないわよ！ 私は？ 大人？。あなた達は？ 子供？。子供が大人に逆らって良いと思ってるの！？ ふざけるのもいい加減にしなさい！」

彼女が逆切れしたことにより、状況はさらに悪化した。

しかし、一人の勇敢な男子が仲介役として分け入ったので、事態は

丸く収まった。

でも、完全な収束には至らず、何か悪いことをしたらすぐに熱くなるような一触即発状態が一日続いた。

そして、無事迎えた放課後…。

「ねえ、桐谷さん」

帰りの支度をしている雨月に桔梗が声を掛けた。

「何、桔梗さん？」

渡された配布物を藍色のリュックにしまいこむ手を止め、雨月は彼女のほうを振り返った。

「桐谷さんって、何部に入るの…？」

桔梗の問いかけに、雨月は首を傾げる。

「部活…？ 今日からだっけ？」

完全に状況を理解できていない雨月に、桔梗は驚きながらも説明を始めた。

「桐谷さん。今日から始まるのは部活動見学だよ？ 正式な部活動登録は来週の金曜日から。…で、桐谷さんは何部に入りたいのかなあ…って思ってた聞いたのよ」

まったく…と彼女は最後に付け加えた。

雨月は忘れていたと心の中で叫んだ。

そして思う。

そういえば、半切れ状態の一条が「今日から部活見学があるので、やる気のある人だけ見に行ってください。それ以外はさっさと姿を消してください」って言ってたっけ。

その後すぐまたピリピリとした時間がやってきたので、彼女はすっかり忘れていたのである。

「ううん…。中学の時やってたから、弓道…かなあ…」

その言葉を聞き、桔梗は晴れやかな表情を浮かべ、言った。

「本当！？ 実は私も弓道部に入ろうかと思ってたの。でも、知り

合いが少ないから、やめようかと思っただけど、桐谷さんがいるから安心した。…ねえ桐谷さん。これから弓道部の活動を見学しに行きましようよ？」

流れるように流暢に言う桔梗。だが、気迫はたんまりと籠っていた。雨月は彼女の気迫に圧倒され、渋々了承したのだった。

桔梗に連れられ、雨月がやって来たのは弓道場。

旭ヶ丘高校の弓道場は学校の敷地外にあり、校舎裏手にそびえる小山の中腹あたりに建っている。

距離的にはそんなに遠くないので、誰でも気軽に行けるようである。そのためか、雨月たちがやってきたときには、大勢の生徒が屯っていた。

ざっと30人は居そうだ。

その中で、背に『旭ヶ丘高校弓道部』と行書体？で書かれた羽織を着て、新人生の世話に追われる一人の小さな少女が居た。

身長はざっと見ても150あれば良いほうだろう。

彼女は濁りの知らない清らかな声で頻りに叫んでいる。

「こちらに順番に並んでください！ 僕達が順番に案内するのでついてきてください！」

その様子を見ながら、桔梗はやや興奮気味だ。

「ねえ、桐谷さん。？僕っ娘？だよ！ 私幸せ…」

雨月は桔梗が何を言っているのか分からず、頭の上に疑問符を浮かべていた。

そんな雨月をよそに自分の世界に入ってしまった桔梗。

「はう…幸せ…」

頻りにそう呟き、時々頬を両手で押さえると、黄色い声を挙げていた。

周りにいる他の生徒は桔梗だけでなく、彼女の傍で訳も分からず突っ立っている雨月も同様に、まるで不思議なものでも見るように見



ていた。

彼らは彼女達に聞こえぬようにコソコソと何かを囁きあっていたのだった。

そうして列に並んでいると、漸く雨月達の所にも案内役の先輩がやってきた。

やって来たのは先程の小さな僕っ娘先輩。

桔梗のテンションは最高潮に達した。

「もう私、倒れそう……」

ふらつく桔梗を雨月は支え、先輩の後になんとかついていった。

「ここは矢を閉まっておく所だよ。ちゃんと先輩ごとに分けられていて、人目で誰の矢か分かるようになっていいるんだよ」

そう言うてかの先輩は一番手前の収納スペースから矢を一本取り出した。

「これが僕の矢だよ」

矢を高く掲げ、後ろの人にも見えるようにしている。

が、後ろの人にはどうやら見えていないようだった。

ちなみに、雨月と桔梗も後ろの方に居たので、かの先輩の矢を見ることは出来なかった。

お次は実際に矢を放つところを正座で見るものだった。

残念なことに、一度も当たることのなかった先輩が数名。がっくりと肩を落としていた。

「ねえ、かわいそうだよね、あれ」

隣の桔梗が雨月に話しかけてきた。

雨月自身経験していることなので、桔梗の言葉に云々と頷いた。

「あれは精神的に結構くるよ？」

小声で二人は囁きあっていた。

そうして、旭ヶ丘高校弓道部の部活動見学を終え、各自帰路に着い

ていた。

雨月は桔梗と校門前で別れると、光圈はもう帰っているだろうと考え、彼の後を追う形で自らも帰路に着いた。

しばらく歩っていると、前方に自分と良く似た出で立ちの少女(?)を発見した。

なにやらその少女はブツブツ何かを呟いているようだったが、雨月はその少女が自分の双子の弟、光圈であると瞬時に見抜くと、彼に小走りで駆け寄ると、挨拶気分で言った。

「光圈、どうしたのその格好!? ……まさか、女装趣味に目覚めたの!？」

すると、光圈は一瞬険しいような、そして悲しいような不思議な表情を浮かべたが、溜息を吐いた。

「いや、違うんだ姉さん。これには深い事情が……」  
そうして光圈は語り始めた。

雨月は最初の内、彼の身に起こった出来事を信じる事が出来ずにいた。しかし、真剣な顔で話す彼が嘘を吐いているとは考えられず、一部で否定する反面、なんとか信じることにした。

一通り話を聞き終えると、雨月が閉じていた唇を開いた。

「それじゃあ、光圈の制服は家にあるってことね」

「そう。だから早く帰りたいよ。こんな姿、クラスメイトに見られたら、恥ずかしくてもう学校行けなくなっちゃうよ……」

肩をガツクリと落とす光圈を宥める為、雨月は自分が思ったことを素直に言った。

「あら、そう? 私的に似合ってると思うけど……」  
「なっ」

何か言おうとした光圈だったが、結局言葉が続かずに口を閉ざしてしまった。

今、彼の顔は真っ赤に熟れた林檎の様である。

突然、光圈は雨月の手を強引に掴むと、顔の色を見られぬようにしながら、不貞腐れた様に言った。

「……いいから姉さん、早く家に帰ろう！」  
「わっ！ ちょっと待って、光圀いいい！」  
雨月は光圀に手を引つ張られ、足が纏れて危うく転びそうになりながらも、早足の光圀について行った。

所変わって、桐谷邸。

家に帰ると女子の制服を着たまま、家中を探して回った。  
だが、肝心の制服が見当たらない。

「ない、ない！ 僕の制服がどこにもない！」

リビングのテーブルに肘を突き、花の香りのする紅茶をすする雨月は、そんな光圀をただ傍観していた。

その時、桐谷家の固定電話が鳴った。

雨月が紅茶を置いて席を立とうとすると、光圀が手を出して制した。

「姉さん、僕が出るからいいよ」

そう言っただけで光圀は固定電話の元へ。

「あー、ありがとう、光圀」

雨月が言い終えた瞬間、光圀は受話器を取り上げていた。

光圀が電話で話しこんでいる間、雨月は外の景色を眺めていた。

そうして紅茶を啜りながら、自分の世界に浸り始めた。

途中、光圀が慌てているのか、声がやや上ずっていたが、彼女の耳には入らなかったようだ。

そして光圀が受話器を置いて落胆すると、雨月の妄想が終わったのは、ほぼ同時のことだった。

第三首『桐谷雨月・其の参』(後書き)

今回からワードに打ち込んだものをコピーして貼り付けるという方式に転換してみました。

このほうが、幾らか楽。

楽を求めたボクが行き着いたのは、楽園と呼べるかどうかと聞かれ  
たら、

「どちらかといえば、楽園じゃね？」  
という場所でした。

この方式を『まさゆめ。』でも取りたいと思います。

特にストーリーが大幅に変わるということではないので、ご安心を  
…。

第四首『担任との溝・其の巻』 (前書き)

今回は少し短めです。すいません…。

体力的に厳しいものがあり、この長さになってしまいました。

早く体力をフルに回復させたいです。

#### 第四首『担任との溝・其の壱』

「んふう…」

眠い。今何時だろう…？

枕元に置いてある置時計を見ると、時刻は午前六時。

どうしよう。起きるべきなのか、それともまた寝るべきなのか…。

私は考えるのがそのうち面倒くさくなってきて、勢いに任せ起きることにした。

ベッドから降りて立ち上がった瞬間、奴は私に襲い掛かってきた。

「ふあっ!？」

ああ、目の前が真っ暗に…って、なおったあ…。

そう、奴とは『立ち眩み』のことです。

一体、何度私を困らせれば気が済むのでしょうか？

もうやってこないで下さい、立ち眩み。

リビングにやってくると、閉じていた窓を全て開け、心地よい朝の風を取り込む。

そうでもしないと、また眠気が襲ってきてしまうでしょう？

窓を開けると、淀んでいた家の中の空気が外に出て行き、換わりに外の清らかな空気が家の中に入り込んできた。

朝食の支度をしながら、私はその空気に浸っていた。

しばらくの間ぼーっとしていた私は魚が焦げた匂いで現実に引き戻された。

「あっ! 魚!」

大急ぎでグリルに向かった私。でも、時既に遅し。グリルの戸を開くと、真っ黒焦げに変わり果てた鮭が現れた。

「あゝあ、もつたいない」

自分の責任だと罪の意識を感じながら、炭と化した鮭を生ごみ入れ

へ。

そして手を合わせ、鮭の冥福を祈ります。化けて出てこられても困るのでね…。

と、その時リビングの掛け時計から音楽が聞こえてきた。時計を見ると、時刻は七時。

これはマズイ。はやく光圀を起こさなきゃ！

急いで朝食を作り終わると、私は光圀の部屋へ直行した。

光圀の部屋に入る前、微かに目覚まし時計の音がして、それを止めて何かを呟く光圀の声が聞こえてきた。

そうして、また静寂が訪れる。

(もしかして、二度寝!?)

最悪の状況は避けられないといけないし…もう、突入！ ドアノブに手を掛け、左に捻った。

「こらあ！ 起きなさあーい！」

ドアを開けて部屋に入ると、光圀は不機嫌そうに上体を起こして目を擦っていた。

「……ふあ、姉さん?…一体どうしたの？」

「“一体どうしたの?” じゃないわよ！ 今日は学校でしょ！ 早く準備しなさい！」

初めてかもしれない。こうして光圀を起こしに来たのは。そう思っている、光圀が目をしよぼつかせながら言った。

「……珍しいね。姉さんが朝シャキつとしているなんてね」

その一言に、得意げになる私。

光圀の言葉に軽く微笑んでみせ、リビングへと下りてきた。すぐに光圀も降りてきて、大急ぎで準備をしていた。

「光圀！ ご飯出てるから早く食べちゃいなさい！ そして早く準備して。学校に遅れるわよ！」

髪の毛を櫛で梳かしながら言うと、光圀は目を点にして私のことを見つめていた。

(私、何か変なことでも言ったかな…)  
少し考えたけど、そんなこと言ってもいないし…。気のせいかな。

「早くしないと置いていくわよ!」

一足先に準備を終えて玄関で光圀を呼ぶ。

「姉さん、待っててよ! もう少しだから…」

リビングから聞こえてきた光圀の慌てた声。

(ふふっ。可愛い)

玄関で、私は微笑んだ。

その後、無事光圀と至福の一時(登校のことです)を過ごす事ができた私は、有頂天で自分のクラスに向かっていた。

周りから、「おはよう」と声を掛けられ、私も笑顔で「おはよう」と返していた。

そして、クラスに到着。

そこで、私は『異常』に気がついた。いつも静かな教室から、金切り声や野太い罵声が聞こえてくる。

「…なんで中から罵声が聞こえてくるの?」

私は朝のフレッシュな気分を教室から聞こえてくる罵声に害され、溜息を一つ。

そもそも何故こんなことになっているのだろうか?

ふと周りを見ると、他のクラスの数名の女子が話しこんでいたので、私はその人たちに尋ねてみることにした。

「あのお…ちよつといいですか…?」

ゆっくり低姿勢で近寄ると、快く承諾してくれた。

「…? いいですよ?」

本当にありがたい。随分やさしい人もいるものだと感じる。

そして、私は本題に移った。

「あの、六組で何が起きてるんでしょうか?」



初対面の相手なので、ついつい口調も丁寧なものになってしまふ。すると三人の内の一人が言った。

「別に畏まらなくてもいいよ。…うーんと、今六組では一条先生と数人の男子がしょうもないことで揉めているのよ」

言い終えると、「呆れるわ…」といった具合に頭に手を当て、首を振る少女A。

(何で揉めてるんだらう…?)

私は心の内で呟き、小首を傾げた。すると、今度は少女Aの隣にいた少女が言った。

「そのしょうもない理由っていうのが…これよ」

徐に制服のポケットから自転車の鍵を取り出す少女B。

(…? 自転車の鍵…だよ…? これで何をどういう風にしたらああなるわけ?)

私は再び心の内で呟いた。正直、分かんなくなってきた。

すると、少女Bの隣にいた長身の少女が言った。

「これに付けるキーホルダーで揉めてるのよ。ああバカみたい」

腕を組み、六組の様子を伺っている少女C。

(ああ、なるほど…。キーホルダーね、キーホルダー…。って、たかがキーホルダーごときで!?)

私は今自分のクラスで起こっている争いの元凶を知り、呆れて持っていた体操着袋を落としてしまった。

「くだらない…」

ついつい心の声が出てしまった。

その後私は三人にお礼を言い、クラスに向かった。そして、徐にクラスの扉を開けた。

開けた瞬間、私の肩に何かが当たり、床に落ちた。

下を見ると、黒板消し。

前を見ると、教師である一条がボールを投げたピッチャーのような姿で固まっていた。

…なんだか、恐ろしく熱いものが私の中でほとばしり始めた。

クラスの皆は非難の視線を一条に向けていた。その視線を受け、言い訳をし、責任から逃れようとする一条。

その姿を見て、私の心は決まった。もう後戻りなんて出来やしない。目的は、ただ一つ。

「死ね、一条！」

一条の首のみ！

私は持っていた体操着袋を思いっきり一条にぶん投げた。

そして、近くにあった黒板消しも一緒に。

それらは全て一条に当たり、彼女は倒れた。

私は一条の近くに落ちている自分の体操着袋を拾うと、床に伸びている一条に吐き捨てるようにして言ってやった。

「ぶんつ。しばらくそのままくたばってなさい！」

あー、スッキリしたと背伸びをして、自分の席に向かって歩き出した。

その瞬間、皆から歓声が上がリ、私はクラスを救った英雄ということになってしまった。

（なんでこうなるのよ…）

私はただ一条の行いに怒りを爆発させただけなのに…。

桔梗までもが私のことを『救世主』呼ばわり。

私は恥ずかしくて、しばらく自分の机に顔を埋めていた。

その間にも、教室の前のほうでは一条が床に伸びていた。

第四首『担任との溝・其の壱』(後書き)

突然ですが、謝辞を…。

本作のPVが7千アクセスを突破し、ユニークも順調に2千を越えました。

これも、本作を読んでくださった読者の皆様のおかげです。

本当にありがとうございます！

これからも「ここで一句！」をよろしくお願いします。

追伸 -

何か本作に対してご意見・ご要望があればお聞かせ下さい。出来る限りのことはいたしますので、お願いします。

第五首『担任との溝・其の式』

只今お昼休憩。

各々持参した弁当箱を広げ、仲の良い友人同士机をくつつけてお喋りを楽しんでいる。

私、桐谷雨月もつい先日仲良くなった堀田桔梗さんと共に楽しい雑談をするはずだった。

「ねえ、桔梗。今日は時間が経つのが早いよね…」

私は何気ないことを桔梗に問うた。

桔梗は弁当箱を手に持ち、入っていたつくねハンバーグを美味しそうに頬張りながら言った。

「うん。そう言われてみれば早かったね」

桔梗はその後に「もしかして、実際に早くなつてたり…」と在り得もしないことを口にした。

思わず、私は笑ってしまった。

実を言うと、私はこの手の冗談が大好きで、ついつい笑ってしまう。だってそうでしょう？ 突然仲の良い友達が在り得もしないことを真顔で、そして真剣に言うんだもの…。笑ってしまうのでしょうか？

「ねえ、桐谷さん。誰に話しかけているの？」

突然、桔梗が小首を傾げて私に尋ねてきた。

私は突然のことに慌てふためいて、「ふえっ!？」と訳の分からないうような声を出してしまった。

その変な“声”を聞き、静かに笑っている桔梗。

ああ、なんだか恥ずかしくなってきた…。

自分でも恥ずかしさから体が火照り、体温が上昇してきたことが分かった。

そんな私を見てか、桔梗がさらに笑い出した。そして、笑いながら言った。

「…う、雨月さん…か、顔が…真っ赤に熟れていますよ…ふふ…」

桔梗の言葉で余計恥ずかしさが増してしまった。

ここは一つ嚴重に言っておかないといけないのかもしれない。

「ちよ、ちよっと桔梗！ あんまり言わないでよ。……は、恥ずかしいんだから」

顔をやや伏せ気味で私は言った。

そして、ようやく彼女は私で遊ぶのを止めた。

「あーあ、楽しかったのに……」

残念そうに桔梗は呟き、自分の弁当箱に入っているおかずを漁りはじめた。

一方私はというと、ひたすら弁当を食べ、先程の失態を忘れようと必死になっていた。

急いで弁当を食べているので、味も全く感じない。

ここまで美味しくない弁当を食べたのは何時以来だろうか……？

小学校一年生……の時だろうか？ いや、それよりもっと後……？

弁当箱に入っていた最後の竜田揚げを口に運びながらそんな事を思っていた。そうして弁当箱に蓋をして、バンダナでそれを縛っていると、突然数名の男子が私の元へとやって来た。そして彼らは口々にこういった。

「……僕（俺）を桐谷さんの弟子にして下さい！ お願いします！」

「」

「うええええ……!?!?」

私はいきなりの事に驚き、慌てた。それを向かい側で見ていた桔梗はまた面白そうに笑った。

「ふふつ。桐谷さん、人気者ね」

そうして自身は弁当箱の隅っこに隠れていた果物（蜜柑の缶詰）に箸を伸ばしていた。

私はそんな桔梗に「桔梗、助けてよお……」と助けを求めるが、一向に助けてくれそうにない。

それどころか、困り顔の私を見て……楽しんでいる。

私は思った。彼女はサディストだと。

しかも、“ド”が付くほどの。

「き、桐谷さん？ 僕たちを…弟子にして頂けるんでしょうか…？」  
少しの間放置された数名の男子の内の一人がポツリと呟いた。それはそれは弱々しい声で。

すっかり彼等のことを忘れていた私はしまったという表情を作って、彼等の方を向いた。

全員がこれから出されるであろう私の決断を聞き逃すまいと、真顔で私の方をまじまじと見ていた。

とても、言い辛い…。

ここで「実は私、そんなに強くないんです。なんで弟子とかそういう類の話はご遠慮します。本当にごめんなさい…」なんて言ったらどうなる事やら…。ああ、本当にどうしたら良いんだろう…。

その時、昼休みの終わりを告げるチャイムが鳴った。

私はその『沈黙』の拷問から解き放たれた。

私の答えを待っていた男子達も仕方なく自分の席へと引き下がっていく。本当に助かった。ありがとう、チャイムさん。

「どうやら助かったみたいね」

後ろから桔梗が私に声を掛けた。

「うん、何とか…」

私は精神疲れした老人のようになりながらも彼女に返事を返した。

「桐谷さん、この後の授業なんだか分かる？」

桔梗は突如話題を変えてきた。いきなり話題を変えられてすぐに答えられるわけでもなく、私は「分からない…」と言った。

その様子をやはり面白そうに見ている桔梗。いくらなんでもこれはひどいと思う。桔梗は突然の問いかけに的確に答えられるのだろうかと思っていると、彼女は先程の答えを言った。

「国語よ。現代文の方ね。担当の先生が…一条なのよ」

私は彼女の言ったことを聞くと、軽く身震いした。なんせ今朝私は彼女（一条）を倒しているのだ。その人が次の時間に私達に国語を

教える…。

私は最悪のシナリオを頭の中に描いた。

《雨月 vision ー頭の中のシナリオ》

チャイムが鳴った。始業を告げるチャイムだ。

私達はせかせかと現代文の準備をして、席に座っていた。

全員、一言も喋らずに、そして姿勢を正して彼女の来襲に備えていた。

彼女の名は、一条。

私達の担任にして、生徒達に当り散らす自己中心的理解不可能人物。残念なことに、彼女を今朝私は倒してしまっている。次の現代文の授業でなにかしら私に不幸な出来事が訪れるに違いない。

そんなことを思っていると、彼女はやってきた。

所々に絆創膏や湿布を貼っている姿が痛々しい。

彼女はやや纏れる右足を引きずるようにして、教卓のところまでやってきた。

そして、授業開始の合図を…掛けなかった。

そのかわり、彼女はこう言った。

「私は今朝、桐谷雨月さんに暴行を受けてこのような姿になっています。彼女が私に土下座で床に頭を何度も擦り合わせて許しを請うのなら、授業を行います。もしそれを彼女が行わなかった場合、私は未来永劫彼女を呪い、現代文の授業を一切行いません。分かりましたか？」

そして彼女は近くにあった椅子を教卓の所まで持ってくる、そこにでんこら座って黙り込んでしまった。

教室内がざわつく。

『おい、これはヤバイ事になったぞ』

『未来永劫現代文の授業が受けられなくなるんですってね…』

『このままじゃ、赤点は確実じゃないか!?!』

皆口々に彼女の言ったことを呟きあい、『赤点』という恐怖に駆られ始めた。

そうして話題は、この状況を作る引き金になってしまった私へと移っていった。

『でも、桐谷さんが謝ればすべて納まるんでしょう？』

『それもそうだな。彼女が機嫌を直してくれるだろう』

『桐谷さんには悪いけど、おとしまえをつけて欲しいよね…』

なんだか、私が全て悪い感じになってしまった。どうすれば…。思い悩んでいると、桔梗が後ろの席から声を掛けてきた。

「桐谷さん…ここは一応形だけとして謝ったほうが良いんじゃないかな？」

曖昧模糊に彼女は答えると、「ねっ？」と小首を傾げた。

どうやら、覚悟を決めるしかないみたい。

自分の席を立ち、優雅に構える一条の元へと歩み寄った。彼女は眉を顰めて立ち上がると、私を蔑むような目つきで眺め、言った。

「何用ですか？…謝るのですか？ ええ！？」

語調を荒げているのは、きつと試しているんだろうと思った。私は彼女の悪口に耳を傾けないようにして、彼女の目の前までやっていると、深々と頭を下げて、そして面をあげて言った。

「今朝のことは本当に悪いと思っています。反省と後悔もしていません。本当に申し訳ありませんでした」

そこまで言うと、面を再び床へと向けた。

そんな私を一条は一度嘲笑い、まるでゴミでも扱つかのように一瞥をくれると、なんとか許してくれたみたい。

ああ、一生の恥を負ってしまった…。

でも、これもクラスの皆の為。ここは我慢しておきましょう。

「これで現代文の授業を終わります」

一条の声で現代文の授業は平和に、そして何もなく終わって

「桐谷、死ね」



…うむ！？ 何か良からぬ言葉を聞いた気が。まあ、気のせいでしょう。そうして私は桔梗と共に、弓道部の部活動見学に向かった。

「…さん。桐谷さん！」

「うわっ！」

突然呼びかけられ、私は心臓が飛び出るほど驚いた。

桔梗は、そんな私を見てニヤニヤ笑い、言った。

「青ざめた顔で、ぼーっとしていて、何か良からぬことでも考えていたのですか？」

「うぐ…」

的確な桔梗の指摘に、私はたじろぐ。

桔梗は、「やはり…」といった表情を浮かべ、言った。

「まあ、予想通りね。次は現代文の授業だから、覚悟しておいたほうがいいかもね」

桔梗はそれつきり口を嚙み、黙り込んでしまった。

私はもう彼女に何を言ってもダメだと思い、机の上に現代文で使う教科書の類を準備し、授業に備えて静かに瞑想を始めた。

第五首『担任との溝・其の式』(後書き)

遅れました。申し訳ありません!!

明日から文化祭が始まるもので、その準備やら何やらで疲労困憊で困っています。

執筆が遅れたのも、そのためです。

決して言い訳のつもりでこの後書きを書いているわけではありません。

必死に弁明しようとしているわけでもありません。ただ、真実をお伝えするべく、書いているのです。

ここ(後書き)に書かれていることは事実であり、全くの嘘ではありません。

そのところ、ご了承下さい。

本当に、申し訳ありませんでした。

## 第六首『担任との溝・其の参』

始まった、現代文の授業。

私が思い描いていた最悪のシナリオは、実際に描かれることは無かつたけど、そこそこ酷い授業だった。

例えば、こんなこと。

それは、授業が始まって間もない頃。

私はいたって普通に授業を受けていたつもりなのに、いきなり一条が荒々しくチョークを取ると、私目掛けてそれを投げた。一条が投げたチョークは、まっすぐ空を切り、私目掛けて一直線。私は怖くなつてそれを避けようとした。でも、右頬にまともに当たってしまった。

「うう……」

当たったところがジンジンと痛む。くそう、一条めえ……。

そんなことはお構いなしといった具合で、一条は授業を進めていった。

次に一条が私に攻撃してきたのは、授業も峠を越えた辺りかな？

一条は教科書に掲載されている有名な小説の一文を読みながら、教室内をゆっくりと歩っていた。

ここまでなら、普通の授業風景。でも、ここからは“異常”な授業風景が始まる。

なぜかというと、一条は私の横を通り過ぎる際、私の右の脹脛はらひに強烈な蹴りを加えてきたのだ。

「痛っ！」

私が蹴られた場所を痛そうに擦ると、一条は鼻で私の事を嘲るように笑って、そのまま通り過ぎていくのだ。

ねえ、おかしいよね？ 私、そんなに酷いことしたっけ？（…あ

つ。朝の出来事は対象外だからね？ あれはただ、自己防衛反応が自動的に起動しただけで…。ノーカウントだからね？)

とにかく、私一人に対して集中攻撃とは…。

この人（一条）、なんで教師として今日まで居る事が出来るのかなあ…。

あれかな？ 裏で色々と手を回して、自分がクビにならないようにしているのかな？

きつとそうだ。それしか考えられない。なんとという根腐れ人間。

そして最後の攻撃は、精神的なものだった。

それは授業の本当に最後。突如、一条が教科書を閉じ、私達を見回して言った。

「では、早速今日から宿題を出したいと思います。今からプリントを配るので、一人一枚取ってくださいね？」

そうやっていつの間用に用意したのか、一条は大量のプリントを取り出し、皆に配り始めた。

皆が渋い顔をしたのは、言うまでも無い。

そのプリントに書いてあったのは、合計200問もある漢字のプリント。

しかも、高校に入学したての私達には確実に解けそうも無い問題ばかり。

一体、この教師は何がしたいのだろうか？

理解に苦しんでいると、前からさらに大量のプリントが回ってきた。だが、一つおかしいことが。

普通、プリントなどを配布するときは、一人一枚取って後ろの人に回すのだが、今私の列で回ってきている大量のプリントは、誰も一枚も取るというわけでもなく、私のほうを見て哀れみの視線を投げかけながら回してくるのだ。

どう考えたって、おかしい。

そうしているうち、その大量のプリントの山が私の元へと辿り着い

た。  
私も同じように後ろの人に回そうとするが、そうしようとした瞬間、止めた。  
なぜかって？ そりゃあ、その大量のプリントが紐できちつと縛ってあり、その縛った紐の間に『桐谷雨月用宿題』って書かれた紙が挟まれているんですもの。  
これを回したって、どうせ自分の元に返ってくること間違いなし。でもこれ、どうやって持ち帰ろうかなあ…。仕方無くそのプリントの山を机の端のほうに移動させると、ちょうど終了のチャイムが鳴り響いた。

そして、放課後。

机の上に置かれたプリントの山（というか、束？）を見て、「はあ…。」とただ溜息を吐く私。  
ざっと見ただけでも、300枚はあるだろう。

「ありえない…。」

溜息混じりに呟いてみる。でも、現状は変わらない。

いくらなんでも、これはやり過ぎでしょう。一条さん？

「はあ…。」

また、溜息が口を吐いて出てきた。もう私の口からは、溜息しか出てこないのかも…。

そんな私に、桔梗が近寄ってきて、声を掛けてきた。

「桐谷さん…私も、手伝いましょうか？」

その言葉を聞いた瞬間、私は桔梗の後ろから光が差し込んでいるのを確かに見た。

それはまるで、天使のようだった。

「桐谷さあくん、戻ってきてくださいさあ〜い」

「…ふえ？…んああ！危ない危ない…。あっちの世界に旅立つところだった…」

あやうく別世界に旅立とうとしていた私をきわどいところで止めてくれた桔梗に感謝します。

「ところで、桐谷さんは何を考えていたんでしょうか？」

いえ、やっぱり感謝しません。

「べ、別に…何でもいいでしょ！」

「おやおやあ？ 桐谷さん、何か隠していませんか？」

「な、何も隠してなんか…」

「怪しいですねえ」。怪しすぎますねえ」

「何も隠してないんだから！ 何も怪しいことなんて無いんだからあー！」

なぜか、絶叫。

教室に、私の渾身の叫び声が響き渡った。

しばらくの後。

私は何とか機嫌を戻し、桔梗と共に弓道部の部活動見学に来ていた。今日は昨日と比べて、人が少ないように思われる。

あれかな？ 突然降ってきた雨のせいかな？ 幸いなことに、私と桔梗は折りたたみ式の傘を持ってきていたので、雨に濡れる事も無く、無事、この弓道場に辿り着くことが出来たのですが、他の人は全身びしょ濡れ。あまりの悲惨さに目も当てられない状況にあった。「桐谷さん。傘持って来ておいてよかったね」

微笑む桔梗。

「うん、そうだね」

それにつられて、私も微笑んだ。

そうしている内に、例の僕っ娘先輩がやって来た。

「はい、今日も部活動見学に来てくださり、本当にありがとうございます。ございますっ！ えーっと、……。あぁ、もう！ 何言おうとしてたか忘れちゃったじゃん！ もういいや。それじゃあ、一列に並んで僕の後についてきてください。途中で立ち止まらずに、逸れない様

に注意してくださいね！ それでは、弓道部見学ツアー、始まりま  
あーす！」

今日はやけにテンションが高いなあと思いつつ、件の先輩くだんについて  
いくことに。

まず、昨日回らなかつたところから始まった。

「ここは看的といつて、簡潔に言つと、この的に当たったか外れた  
かを判断するところなんだよ。意外と重要で、間違えると怖あゝい  
先輩に猛烈に怒られるから、集中していないといけないんだよ」

そこで一旦話を止め、先輩は身震いをした。顔が青褪めている。き  
つと、先輩も経験したことがあるのだろう。その、怖あゝい先輩に  
よる、猛烈な説教を。

「つ、次に行こうか…」

身震いした後、先輩は何だか元気をなくしたようだった。やや俯き  
ながら、弓道部の設備や伝統などを紹介して回った。

弓道場内部に来てふと、私は外を見た。

あれだけ強く降っていた雨が上がっていた。そして、遠くに虹が架  
かっていた。

「あつ、虹！」

誰かが言った。

その声につられ、遠くを見つめ、虹を見つげようと必死になる一同。  
見つけられた人は喜び、その虹に見とれていた。

逆に見つけられない人は前者を妬み、虹の在りかを知ろうと前者を  
問い詰めていた。

もちろん、私は前者に当たる。

逆に桔梗は、後者に当たっていた。

「ねえ、桐谷さん。虹ってどこ？」

きたきた。

「ほら、あの電線の上辺り」

私は指を虹に向けて伸ばし、彼女に虹の在りかを知らせた。すると、

桔梗も虹を見つけたらしく、「あつた、あつた！」と小学生のように飛び跳ねて喜んだ。

「ねえ、君達。虹ってどこにあるのか教えてくれないかな？」

突然かけられた声に「はい？」と振り返ると、袴を秀麗に身に纏った長身痩せ型の男の人がいた。大方先輩だつて事が伺える。私はゆつくりと顔を上に向ける。

「！」

私が彼の顔に到達したとき、私の心臓が跳ね上がった。

(な、なんたる美形…)

そう、彼は“美しかった”。

言葉を変えて言えば、“美少年”。

すらりとした胴体に奇跡的にくつついているかのような顔。

その顔には、何度も緻密な計算が施されているかのような配置で、目、鼻、口がついていた。

髪の毛はなぜか真っ白で、長さは肩まで達する。

眉毛も白く、全体的に清潔感を感じる。

私はこの人に見とれてしまった。と、同時にこの先輩に対し、恋愛感情が生まれてしまった。

「…どうしたんだい？ 顔が真っ赤だが…熱でも出ているのかな？ 心配そうに私の顔を覗き込む某先輩<sup>なにがし</sup>。」

「い、いえ！ だ、大丈夫…ですので！」

私は壊れかけのロボットみたいに、喋り方や動きにキレがなくなつてきてしまった。

「大丈夫なら安心なのだが…。ところで、虹は如何程に？」

先輩は片手に弓を持ち、キョロキョロと辺りを見回した。

あっ！ そうだった。先輩は虹を探していたんだつた。私は急いで虹の在りかを教えた。すると先輩は、

「おっ！ あつた、あつた。名前も知らない君、ありがとう。恩に切るよ」

そう言つて、虹を見つめていた。その横顔は、何故だか嬉しそうに



輝いていた。

そして私はこの日、生まれて初めて恋心というものを知った。

第六首『担任との溝・其の参』(後書き)

毎度毎度遅くなってしまう、申し訳ありません…。  
心の底から、謝罪します。

ところで、ストーリーが思わぬ方向へ流れていきそうです。  
もしかしたら、キーワードに新しく『恋愛』と加えなければなら  
ない雰囲気になってしまいそうで、とても怖いです。

ボクは恋愛なんて未経験なので、恋心なんて本文に書いたけど、ま  
ったく分かりません。

ボクにとって恋愛小説は、未知との遭遇に匹敵するぐらいのもので  
す。

もしそうだったら、最後の手段として、強制終了も行うかもしれま  
せん。

まあ、多分そうなる前に路線を元に戻すと思います…。

## 第七首『夜、来る』

あれから、私の頭の中には、あの白髪の先輩が微笑みかけている様子が何度も呼び起こされた。

名前も知らない先輩。私は、はやく彼の名前が知りたくて仕方が無かった。

かといって、聞きに行くことは出来なかった。

だって…あの先輩の前に行くと、身体が固まっちゃって…そのお……。

と、とにかく、あの先輩に直接名前を聞きに行くことは不可能だった。

かといって、ずっとこのままっていうのは嫌だ。

私は帰宅途中、ずっとかの先輩の名前をどうやって知ろうかと様々な策を考えていた。

そして、帰宅。

「ただいまあー！」

玄関のドアを開けて、中に入る。

「おかえりいー！」

リビングのほうから、光圀の元気な声が響いてきた。

…なんだか、昨日とは打って変わって、声色が明るくなったような…？

「気のせい…よね」

ポツリと呟いて、靴を脱いで家上がった。

リビングに入ると、いい匂いが鼻をつく。

そう、それはホワイトシチューの匂い。

もちろん、作っているのは光圀だ。

それにしても、満面の笑みを浮かべながら、鼻歌を歌っているのは

何でだろう？ 何か良いことでもあったのかなあ…？

「光圈、どうしたのそんなに機嫌よさそうにして…？」

私は彼に問いかけてみた。

光圈は「ん？」とこちらに視線を移して、そして言った。

「それはねえ…ふふっ 僕の制服が返ってきたんだよお！ 長かった、本当に長かった！」

なるほど。どうりで。

「それは良かったじゃない。明日からもまた普通に登校できるね」

「うん。本当によかったよ」

心底嬉しそうに微笑んでいる光圈をみると、私までもが嬉しくなってきた。どうりで。

先程まで頭の中に居た先輩は、どこかへ消えうせてしまったのだろうか？ もう私は彼の事をすっかり忘れてしまい、光圈に訪れた嬉しい出来事に、ただ嬉しくなるばかりだった。

「「いただきます！」」

目の前には、皿一杯によそられたホワイトシチューに、食パンが二枚。

白い海には、様々な色の島が浮いていた。

見るからに美味しそう。

私はたまらず、スプーンでシチューを掬い、口元へ運んだ。

そして、味わう。

「お、美味しい…」

本当に美味しかった。光圈がここまで料理を作れたとは知らなかった。

姉として、不覚…！

「美味しい？ 本当に？」

目を輝かせて、光圈が私に尋ねかけてきた。

「うん。本当に美味しい」

私が再度、シチューの味の感想を述べると、彼は「一生懸命作って

よかった…」と、一言。

彼の顔には、努力の証が表れていた。

「光圈、はやく食べないと冷めちゃうよ？」

一口も食べずにいた光圈に声を掛ける。すると、彼はやや慌ててスプーンを手に取った。そして、豪快にシチューを食べ始めた。

「美味しい…。今度、また作ってみよう」

彼は、食べている途中そんな事を呟いていた。

食後。

私は食べ終わった食器などを洗い場に持っていき、いざ、洗うために蛇口をひねった。しかし、光圈がそんな私を制して言った。

「あつ、姉さん！ 食器は僕が洗っとくからいいよ。そこに置いて」

私は少し悪い気がしたが、本人がそこまで言っているので、「それじゃあ、お願いね？」と一言言つて、自分の部屋にやって来た。

来ていた制服を脱ぎ、部屋着に素早く着替えた。

そして、ベットに身を預け、最近買ったばかりの小説を読み始めた。

1ページ目。

いきなり、主人公が天に召された。

「なんでよ！」

思わず突っ込んでしまった。

いきなり主人公が死ぬって、どんなストーリーよ。

この先、どういう風に話が展開していくのか、読み始めて数秒で分からなくなった。

10ページ目。

世界が滅んだ。

「これじゃあ、話も展開も無いじゃない！」  
「またも突っ込んでしまった。」

主人公が死んでから、やや物語の世界観が広がる気配を感じたけど、流石に世界が滅びたとなると、まったく状況が分からなくなってしまう。

「というか、この本ってどういうテーマで書かれているの？  
読んでいたページに栞を挟み、本の裏面を読んでみた。」

『いきなり主人公が死んで、そして世界が滅びてしまう。  
読んでいて、その急展開さに読者は必死についていく。』

昨年単行本として出版され、一大ムーブメントを巻き起こした本作が、待望の文庫化！ あなたは、このハイスピードストーリーについて行く事が出来るだろうか？』

…もう、置いていかれました。  
「どうりで、読んでいて疲れると思った。」

「なんでこんな本が一大ムーブメントを巻き起こしたのだろうか、謎に思った。」

「そして、私はその本を本棚に戻す。  
多分、もう手に取ることもないと思いながら…。」

「気がついたら、夜もかなり更けていた。」

「いつの間にか眠ってしまったらしい。枕元の時計を眺めると、午後11時47分と表示されていた。」

「ま、マズイ！」  
「すっかり忘れていた、お風呂。」

「これから入るにも、かなり勇気が要るかも…。」  
「言ってしまうと、私は極度の怖がりだ。」

「夜、一人でトイレにも行けない。」

「よく光圀は「幼稚園児じゃないんだから…」と溜息混じりに言うけ」

ど、怖いものは怖いだから仕方が無い。  
急いでお風呂の支度をして、光圀の部屋に向かった。

所変わって、脱衣所。

「んむう……。姉さん、明日でもいいんじゃない……？」

眠たそうに目を擦りながら、光圀は言った。

「ダメなのよ！ 光圀には分からないと思うけど、年頃の乙女にとって、お風呂は大切なものだからね!？」

私は言葉の一つ一つに力を込めて言った。

「……ああ、うるさいなあ……。分かったよ。なるべく早めにね？ ふああ〜」

耳を押さえ、顔を顰めながらも、光圀は何とか了承してくれた。

「ありがとう、光圀！」

私は光圀に礼を言っていると、そそくさと部屋着を脱いでいった。

浴槽に浸かると、私の身体から、疲れがお湯に溶けていくようだった。

よくお年寄りが温泉に浸かって「極楽、極楽……」と言っているときの気持ち、今漸く分かった気がする。

私はその後、素早く身体と頭を洗って、無駄毛を一網打尽にし、顔の油分を洗い落とすと、脱衣所に通ずる扉を開いた。

脱衣所と廊下との境にある扉は、ピッタリと閉まっている。そこに、光圀の影がぼんやりと映っていた。

「光圀、ごめんね？ もう上がったから、もうちょっと待っててね？」

私が髪の毛の水分を取りながら声を掛けると、「了解……」と眠たそうな光圀の声が返ってきた。

あまり待たせてはいけないので、これまた素早く衣服を着ると、扉を開けた。

扉を開けると、光圀が眠たそうに目を擦り、大きな欠伸をしていた。

「少し遅かったよ……」

少し怒ったように、ポツリと呟いた。

「ごめんね、光圈……」

罰が悪そうに言う私を見て、光圈はひとつ溜息を吐いた。

そして、自分の部屋まで一緒について来てくれた光圈に改めて礼を言い、私は自分の部屋に入った。

ベッドに横になって、今日は光圈に迷惑を掛けてしまったなあ……と反省し、明日何かお礼としてなにかしないといけないなあ……と思った。

これだけは忘れないようにしようと心に誓い、目を閉じた。

それから、私はあつという間に夢の世界へと旅立っていった。



## 第七首『夜、来る』（後書き）

はい、どうも。

久っしぶりの更新です。

一応、この話で雨月編はお休みと考えています。

次の話から、再び光圈編に戻そうかなあ…と考えております。

多分、また十話くらい光圈編を進めて、その後雨月編…というように、交互になるように進めていこうと考えていますので、あしからず。

光圈編と雨月編。二つあるから、面白いのです。

二人の視点からみた世界は、同じようで違うのです。

まだ終わりは見えませんが、長くなりすぎないように注意します。

それでは、また。

第十一句『入部決定?』（前書き）

超お久しぶりです。

忘れてないですか？ 更級優月です。

昨年十月七日から、およそ二ヶ月と半月ぶりの更新です。

ですが、物凄く短くなってしまいました。

お、怒らないでくださいね……？

それでは、ど、どうぞ！

## 第十一句『入部決定?』

放課後、突然教室にある人物がやってきた。

その人物は、俳句・川柳部の佳奈先輩だった。

「このクラスに、光圀という名の少年はいるか?」

高くも低くも無く、それでも良く通る声だった。

もちろん、僕はその声が聞こえなかったわけでもなく、反応するよ  
うに立ち上がった。

彼女のほうも分かったみたいで、「こっちへ来い」と手招きなんか  
している。

そしてすぐ、廊下へと姿を消した。

一体、何だろうか。

多くの謎を抱えながら、僕は佳奈先輩の元へと急いだ。

廊下に出ると、教室内の温度差に驚く。

空気は冷え切っていて、背筋に寒気が走る。

「来たか。少年」

突如、後方で声がした。

振り向くと、腕を組んだ状態でこちらを見つめる佳奈先輩が目に入  
った。

「どうしたんですか、先輩」

若干怒り感情を入れて、僕は彼女に訊ねた。

すると、彼女は特に僕の声色を気にせず、淡々と用件を話し出した。

「少年……いや、光圀。お前、俳句・川柳部に入る気はないのか?」

「……えっ?」

逆に問われてしまった僕。

「そ、それは……」

言葉を濁らせ、視線を泳がせた。

なんせ、これも部活勧誘策の一つだから。

多分、目を合わせたら最後、否応なしに俳句・川柳部に入らなくてはならないんだからな。

あの部活は、先輩に色々とお世話になったからね。入る気にはならない。

でも、それをここで言うとなると……

「どうだ？ 少年」

佳奈先輩は期待を込めたように僕を見ている。

これはヤバイな。

また視線を泳がし始める。

が、偶然にも視線が交わってしまふ。

その瞳には、強気な感情は宿っておらず、むしろ、嘆願するような感情が見て取れた。

や、ヤバイ！

「少年。部活動入部届けの紙なんだが、締め切りは今日だぞ。決めるなら、早めにしたほうが良いからな？」

心の中で動揺を必死に宥めていると、先輩がそう言って、残念そうに去っていった。

僕はその場で先輩を黙って見送っていたが、姿が見えなくなると、大きな溜息を吐いた。

部活動入部届け、か。

いつその事、帰宅部でもいいかなあ……。

でも、姉さんが黙っちゃいないから、どうしようか。

暫くその場で立ちすくんでいると、手短にある教室の扉が開いた。

「ん？」と思ってみていると、そこから出てきたのは播磨君。

僕は思いついた。

『そつだ、播磨君に相談してみよう！』と。

「は、播磨君！」

僕は、播磨君を人気の少ない場所へと誘った。

「で、何でこんなところに連れてきたんだ？」

現在、中央廊下の一角にある物置スペースに播磨君を連れてきた僕は、何をどう説明するか考えていた。

だから、播磨君が訊ねてきたこととは露知らず。

「おい、聞いてるのか？」

「えっ？」

漸く気がついた。

「どうしてここに連れてきたんだって」

若干播磨君の声に怒りが見え隠れする。

それに僕は慌て、伝えたいことがしどろもどろになってしまった。

しかし、なんとかつたわつたらしい。

それを聞いた播磨君は、深刻な表情を浮かべながら腕を組む。

唸り声は、悩んでいる証拠だ。

「でもよお」

唐突に播磨君が口を開いた。

「なに？」

僕は彼にその先を促す。

彼は応じるように話し始めた。

「それはそれでいいんじゃないかねえかな？ 帰宅部なんて嫌だからなあ

……」

「は、播磨君！」

君はすごいね。

どうしてあんなところに入るといえるんだろうか。

でも、播磨君の言ってる事にも一理はあるんだよねえ。

……仕方ないかな。

ここは覚悟を決めるしかないのかもしれない。

僕は高をくくった。

「それじゃあ、僕も入るよ。俳句・川柳部」

僕は、播磨君にはつきりとそう伝えた。

それから、僕と播磨君は俳句・川柳部の部室へと歩を進めた。

第十一句『入部決定?』（後書き）

おひさだよ！ 俳句・川柳愛好会！

光圀「何、このたて看板」

雨月「さあ、知らない」

光圀「とにかく、一句作れってことじゃないかな？」

雨月「そういうことになりそうね」

光圀「どうする？ 姉さんが作る？」

雨月「うーん……。それじゃあ、作りますか」

光圀「それでは、どうぞ」

雨月「”停止中 知らない間に 年を越す”」

光圀「誰か、僕にハンカチを下さい……。 （泣）」

2011年1月28日：内容を部分的に追加しました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2443k/>

---

ここで一句！

2011年2月1日06時44分発行